TOTO 通信

2015年 夏号

Toward a Creative Architectural Scene

特集

ヴィンテージ住宅の未来

Special Feature
The Future of Vintage Residences

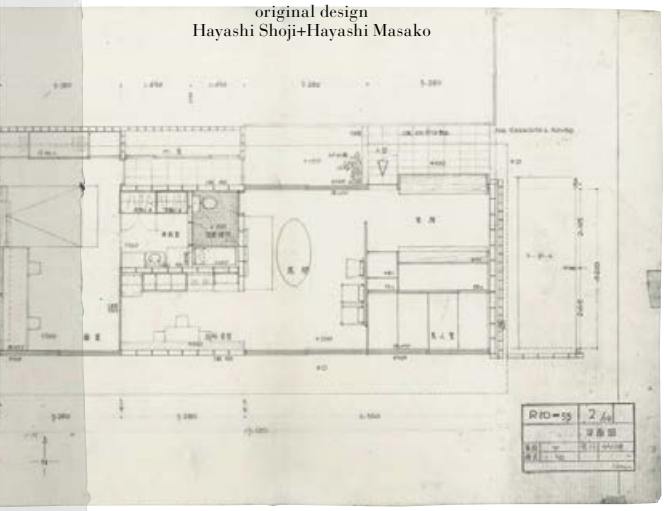
特集／ヴィンテージ住宅の未来

Special Feature
The Future of Vintage Residences

過去に建築家が設計した数々の名作が再生され、あらためて注目されている。それらは時を重ねた味わいのある住宅であり、名作ならではの歴史が実証してきた質をもった住宅でもある。いわば「ヴィンテージ住宅」。ストック型社会といわれて久しいが、名作住宅が取り壊されたという話もあちらこちらで耳にする。取り壊しにはそれぞれの事情があるものの、名作の消失を惜しむ気持ちも芽生える。自然な淘汰だと割り切ることもできない。ヴィンテージ住宅の未来が明るいことは、現に継承された住宅建築の新しい息吹きを見れば、おわかりいただけるだろう。

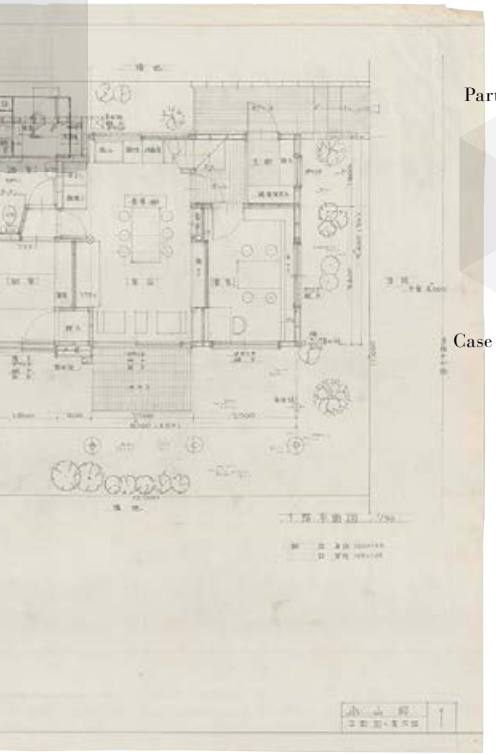
Part 2

Case Study
"House in Koishikawa"
original design
Hayashi Shoji+Hayashi Masako



Part 5

Case Study
"Kankyutei"
original design
Ikuta Tsutomu



1/200

野沢正光+安田幸一		4
原設計／林 昌二+林 雅子	改修設計／安田幸一	10
原設計／吉村順三	改修設計／樋口善信	20
原設計／アントニン・レーモンド	改修設計／元良信彦	30
原設計／生田 勉	改修設計／Eureka+三浦清史	38

シリーズ

旅のバスルーム94	文・スケッチ／浦 一也 西村屋本館（日本・城崎温泉）	46
現代住宅併走30	文／藤森照信 「まつかわ・ぽっくす」 設計／宮脇 檀	48
最新水まわり物語38	GALLERY TOTO	54
地域に生きる会社66	根建工務店	58
TOTOギャラリー・間で展覧会をします	フィールドオフィス・アーキテクツ展 Living in Place	60
News File	TOTO News, Cera Trading News, Books	62

『TOTO通信』をインターネットでご覧いただけます。 → www.toto.co.jp/tsushin/

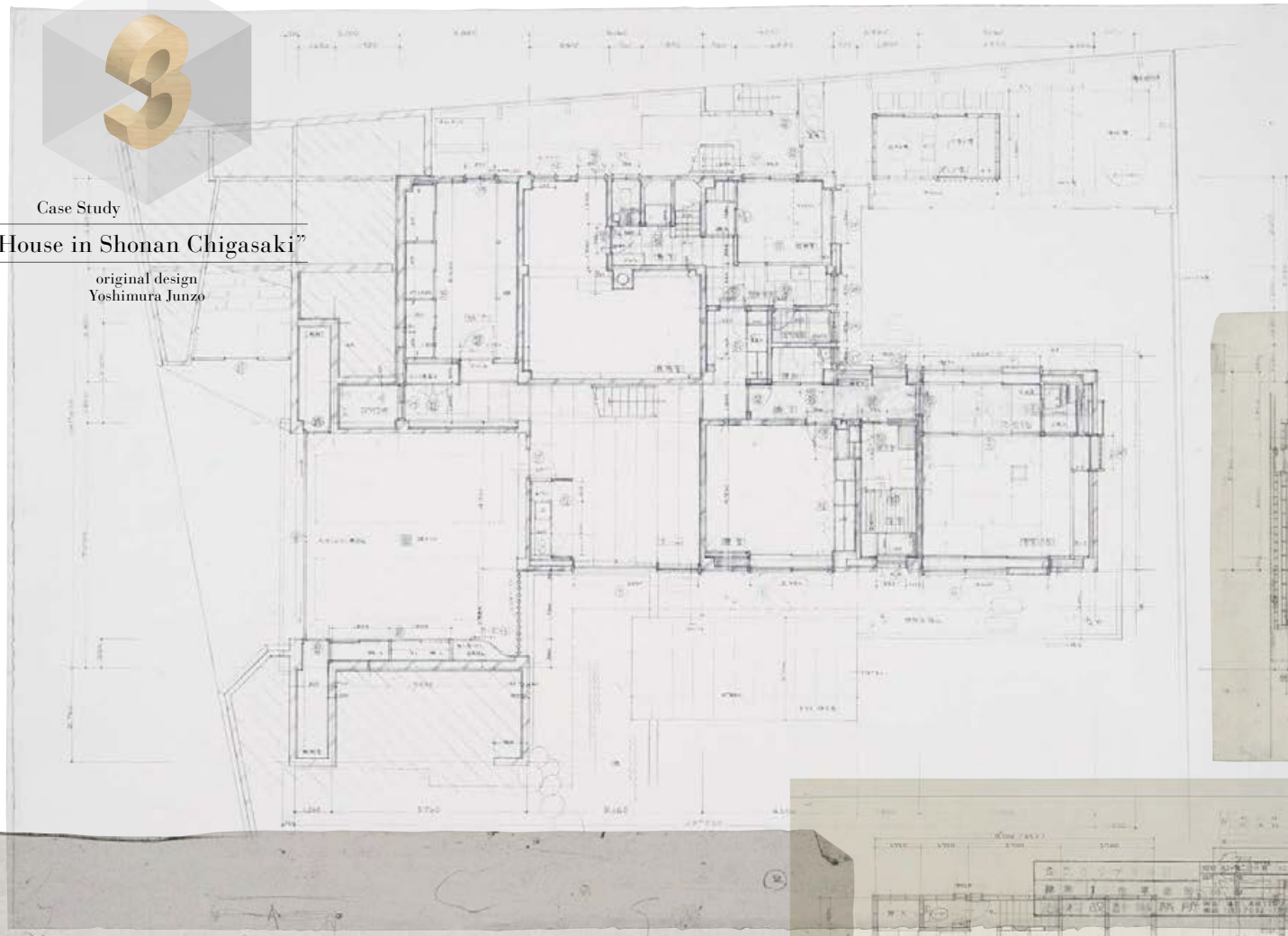
表紙／「OKA MASAKAZU HOUSE」の西側外観。
写真／川辺明伸
編集制作／伏見編集室
デザイン／岡本一宣デザイン事務所
印刷／ゼネラルアサヒ

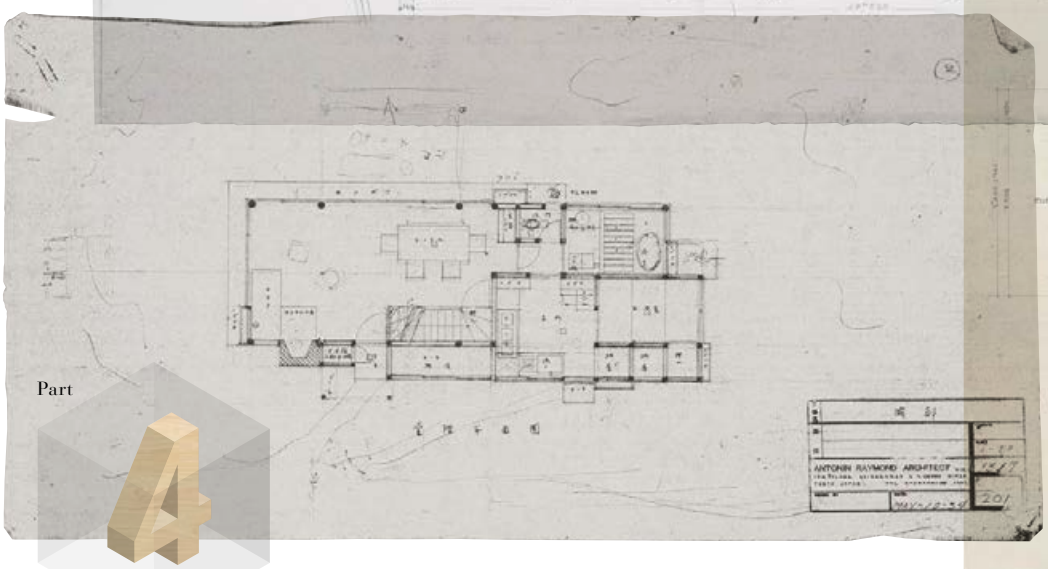
Part 3

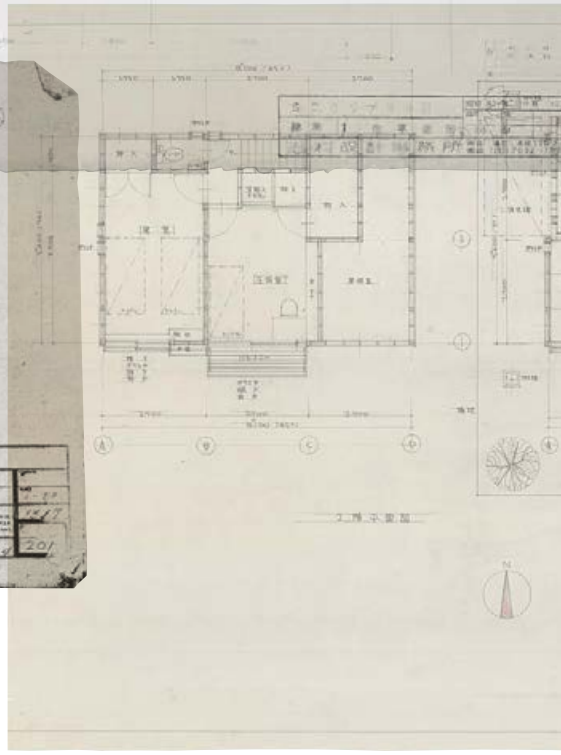
Case Study

“House in Shonan Chigasaki”

original design
Yoshimura Junzo







Part 4

Case Study

“OKA MASAKAZU HOUSE”

original design
Antonin Raymond

Part 1

Discussion
Nozawa Masamitsu
+
Yasuda Koichi

TOTO 通信

Toward a Creative
Architectural Scene
Number 507
Summer 2015

特集1 対談	住宅建築の継承を考える	
特集2 ケーススタディ	増改築のたすきをつなぐ	作品／「小石川の住宅（「私たちの家」改修）」
特集3 ケーススタディ	引き継ぐ決断と意志	作品／「湘南茅ヶ崎の家」
特集4 ケーススタディ	復原にも創作を	作品／「OKA MASAKAZU HOUSE」
特集5 ケーススタディ	引き継ぐための増築	作品／「感泣亭」

特集／その1

住宅建築の継承を考える

対談

住宅遺産トラスト代表理事・建築家
野沢正光＋安田幸一
東京工業大学大学院教授・建築家

過去の名作住宅の継承
とはいっても、
ある程度は
自由な創造も必要です。

Yasuda Koichi

Special Feature
The Future of Vintage Residences

Part 1

Discussion
Nozawa Masamitsu
+
Yasuda Koichi

古いものは
宿題を抱えています。
新陳代謝も
時には必要ですね。

Nozawa Masamitsu

過去に建築家がつくった名作を
継承する事例が増えている。
住宅遺産トラスト代表理事の建築家・野沢正光さんと、
林昌二・林雅子夫妻の自邸「私たちの家」を改修し、
自ら住まわれている建築家・安田幸一さんに、
継承の実態と秘訣を聞いた。

聞き手・まとめ／伏見 唯　写真／藤塚光政（特記を除く）

モダニズム住宅の継承の時が来た

――今号は「ヴィンテージ住宅の未来」と題した、名作住宅の改修事例を特集します。改修を経て次代に引き継がれた事例を参考に、過去の名作を継承する方法を考えていきたいと思います。最初に、まさに価値ある住宅建築の継承を考えるための組織である「住宅遺産トラスト」について教えてください。

野沢正光　「住宅遺産トラスト」が設立された最初のきっかけは、吉村順三が設計した「園田高弘邸」（１９５５）です。まだ戦後の建築面積の規制があった頃に建てられた、わずか18坪（建築面積）ほどのすごく小さな住宅なのですが、今日ではまねできないほどに密度の高いすぐれた住宅です。この住宅の施主だったピアニストの園田高弘さんが２００４年に亡くなられた後、奥さまが「吉村順三の貴重な仕事なので、この住宅を誰かが引き継いでくれないか」と考えられたのです。その想いに応えようと集まったのが「園田高弘邸の継承と活用を考える会」であり、「住宅遺産トラスト」の前身にあたります。

――ひとつの住宅がきっかけだったのですね。どのようにして、大きな活動に展開したのですか。

野沢　「園田高弘邸」は自由が丘の高級住宅地にありますから、土地代だけで相当な金額になることもあり、なかなか引き取り手は見つかりませんでした。そのため、最終的に引き取り手が見つかるまで、４～５年ほどの時間がかかりました。そのあいだに社会に対して、いくつかのアクションを起こしたのです。ひとつは「音楽と建築の響き合う集い」（08～）。メンバーのひとりの林泰義さん（都市計画家）が、住宅を外に開くことで地域社会を豊かにすることを熱心に考えていたので、その考えに園田夫人も共感され、「園田高弘邸」で演奏会と建築レクチャーを催しました。もうひとつは、「昭和の名作住宅に暮らす――次世代に引き継ぐためにできること――」（12）という展覧会です。この展覧会は、同時期に吉田五十八の「旧倉田邸」（１９５５）や「新・前川國男自邸」（74）の保存の話が立ち上がっていたので、それぞれの引き取り手を募る意味も含めて、名作住宅の魅力を伝えるために催したものです。この展覧会は、日本経済新聞で「昭和の名作住宅を守れ」という記事になりました。要は情報が全国に広まったということだと思いますが、それ以来ほかの住宅の相談もちらほらと飛び込んでくるようになりました。モダニズム住宅の継承の時期が来たのでしょうね。個別の問題ではないことを痛感し、２０１３年に一般社団法人として「住宅遺産トラスト」が設立されることになりました。

住宅を住宅として継承する

――「住宅遺産トラスト」の設立が象徴しているように、建築家の名作の継承が各所で注目されているわけですね。安田さんも、林昌二と林雅子の自邸「私たちの家」（１９５５／10～19ページ参照）を改修して継承し、自ら住まわれています。当事者でもある安田さんは、名作住宅の継承をどのように感じていますか。

安田幸一　住宅を住宅として引き継ごうと思うと、一般的には困難も多いと感じています。この「私たちの家」や「園田高弘邸」もそうですが、モダニズムの名作といわれている住宅の多くが50年代につくられていて、そろそろ、構造や設備なども含めた物理的な寿命が突きつけられています。一般的に名作住宅の初代施主は、もちろんその住宅に対して非常に思い入れがあって、寿命がせまってきたとしても、なんとか保持していきたいと考える。しかし、世代交代の時期になり、２代目や３代目にそこまでの強い思い入れがない場合には、生活面や金銭面で無理をしてまで、寿命の近い建物を延命させることに意味はあるのか、と考えるのだと思います。相続のこととか、いろいろなお金の話もありますが、そもそも住宅を物理的

園田高弘邸

写真：齊藤さだむ

１９５５年につくられたピアニスト・園田高弘の住宅。設計は吉村順三。建築面積18坪、延床面積23坪ほどの小住宅である。戦後の規模や材料に制限がある頃の作品で、小さく、また簡素な素材でつくられているが、ほかの50年代の小住宅と同様に、制限があるからこそ、今にも通じる合理性と潔い意匠が実現している。担当は、当時吉村順三設計事務所にいた家具デザイナーの松村勝男。

にどこまで生き延びさせるか、その判断がせまられているのだと思います。人間と同じで、寿命が来たらきれいに死んでいくというのもひとつの姿だし、たまたま健康であれば、がんばってもうちょっと生きてほしいと延命させることがあってもいい。「私たちの家」はぼくらにとって特別な存在なので、少しだけは延命させることができましたけれど、ぼくらが死んだ後はどうするのか、考えていかなくてはなりません。永久住宅というのはないと思っていますから。

野沢　確かに、「住宅遺産トラスト」の活動においても、2代目や3代目などの後継者に無理が生じないように、今の世代の生活と過去の住宅をどうやって整合させるのか、ということはかなり考えていかなくてはならないと思っています。安田さんのいう戦後の名作住宅は、規模制限があったこともあり、かなり小さいものが多いですから、今の生活に合わないということもあるでしょうし、逆に戦前の「加地邸」(28／遠藤新設計)などは大きすぎて、個人住宅という感じではないですよね。だからもともとの状態に必ずしも縛られなくてもよくて、既存の古い建物の価値を「ヴィンテージ」としてあらためて発見することが必要なのだと思います。またオリジナルにとらわれすぎて、昔の状態を再現しようとすると、いかにもレプリカという感じになって、すごく気持ちの悪いものになってしまうこともあります。意匠や技術、あるいは手間をかける部分への社会的なスタンダードが変わっていますから、むやみに懐古主義的に過去にさかのぼるのはスマートではない。

安田　そうですよね。こういう住宅を引き継ごうと思ったら、寒いままでいいのか、お湯が出なくてもいいのか、などといった非常にシンプルなことを一つひとつ解決していかなくてはいけません。だから、ある程度は自由に創造していく、ということが継承の秘訣だと思います。従来の設備のままだと電気代がすごいことになりますし、過去の仕様を職人に頼むと大変なコストになる、などといったリアルな懐具合との兼ね合いもあるはずです。

野沢　古いものは古いものとして、やはり宿題を抱えているわけですね。その宿題に対する答えを出すように、住宅設計は改修であろうと今の方法で解決しないといけない。そのため一種の創作はもちろんあってしかるべきです。それが住宅を住宅として残すうえでの宿命なのだと思います。まして「私たちの家」は、林さん自身が何度も増改築をしてきた住宅なのですから、そうした新陳代謝はむしろ「私たちの家」の延長線でもあるのではないでしょうか。

今の世代の生活と
過去の住宅を
どうやって
整合させるのか。

Nozawa Masamitsu

住宅以外の用途へ

――住宅以外の用途へのコンバージョンについてはいかがですか。

野沢　先ほどの「園田高弘邸」は、半分は住宅、半分は別用途のように使われています。「園田高弘邸」の引き取り手は大阪に住んでいる吉村順三のファンの方で、自宅は大阪にありますから、東京に出てきたときのセカンドハウスや、仕事の打ち合わせスペースなどに使われているそうです。われわれにこれまでの活動を継続してもいいよと言ってくださっているので、引き続き「音楽と建築の響き合う集い」の開催場所でもあります。この住宅の場合は、園田夫人も新しい住まい手も、住宅を開く活動をとても楽しんでくださっていることが重要なんです。こういう活動は、楽しまないと続きませんから。

安田　それはよい残り方をしましたね。自分のことを棚上げしていいますと、名作住宅とはいっても、必ずしも住宅として継承されなくてもよいのではないかと考えています。もちろん住宅には人が住んでいるほうが、建築本来の息吹きが生きる

加地邸

写真：小野吉彦

三井物産に勤めた加地利夫(初代ロンドン支店長)の葉山の別邸。竣工は1928年、設計はフランク・ロイド・ライトの弟子にあたる遠藤新である。遠藤は、建築から、家具、照明器具に至るまで、総合的に設計する「全一」という建築哲学をもっていたが、「加地邸」はまさにその「全一」を実現した住宅だろう。住宅遺産トラストにて、新たな引き取り手を募集している。

ことになるとは思います。ただ、人口が減少してますます住宅が余っていくようになると、住宅として残すだけでなく、余裕のある組織や人たちの手によって、セカンドハウスやギャラリーに転用されるのもよいことだと思っています。昔、フィリップ・ジョンソンが設計した「ロックフェラー・ゲストハウス」(50)を見に行ったときに、ロンドン在住の画商が買い取って、竣工当時のオリジナルの姿に戻すという工事をしていました。その後、すごくきれいな状態になってギャラリーとして継承されていました。復原というより、むしろ質の向上という印象でした。そうした継承は、死殻を残す行為では決してなく、新しい生き方を与える行為だと感じたのです。

野沢　移築された例ですが、坂倉準三が設計した「旧飯箸邸」(41)を転用したドメイヌ・ドゥ・ミクニというレストランもありますね。また、明治村や江戸東京たてもの園のように、博物館の教材として、あるいは建築史の説明として、過去の建築を時間をとめて保存する、という考えも重要です。これらの住宅にも新しい生き方が与えられています。先ほども言いましたが、今とはかなり異なるライフスタイルを想定してつくられた名作住宅を、無理に現代住宅にしなくてもよいのかもしれません。住宅以外に転用された幸せな事例は結構ありますから。いずれにしても、うまくいった事例はよい嫁ぎ先が見つかったものばかりです。

嫁ぎ先をどう見つけるか

——住宅は誰かの所有物なので、結局はよい所有者との出会いが、ヴィンテージ住宅の未来にとっては重要なのですね。

野沢　ぼくらはいろいろな相談を受けてはいますが、不動産取引をしているわけではないので、住宅を買ってくれる嫁ぎ先の耳に情報が入るように、周知をするのがおもな活動です。ホームページなどでの住宅の掲載や、建築見学会はまるで文化活動のようですが、じつは嫁ぎ先を探すための催しでもあります。坂本一成さんが設計した「代田の町家」(76)でも、「住宅遺産トラスト」主催で見学会や展覧会を行っていたら、「この住宅に住みたい」という方が現れたのです。外国の方でしたが、坂本さん自身の監修によってキッチンなどを改修しました。所有者が変わっても、ちゃんと住宅として継承されましたよ。

安田　多くの人の目に触れることが、可能性を広げたのですね。そういう意味では、遠まわりですが、普段から一般の人に建築を理解してもらう、ある種の普及活動が結局は重要なのでしょうか。建築や住宅を取り上げる一般誌も増えてきていますから、少し前とは全然状況が違います。

野沢　私もこの活動を通して、一般の人と建築の話をする機会が増えてきていますが、吉村順三のファンがとても多いということをあらためて認識しています。弟子筋の私がいうのもなんですが、吉村さんの住宅は割と普通に見えるのに、一般の人からきわめて評価が高い。東京藝術大学で催された吉村順三展には、すごい数の来場者が訪れましたから。一般の人が建築家のヴィンテージ住宅に付加価値を見出してくれるかどうかは、全般的にはわからないのですが、少なくとも吉村さんに関しては不動の評価がありますよ。これはもはやブランドといえるかもしれません。

安田　吉村さんのファンが多いというのは、建築業界全体にとってもすごくよいことですね。吉村さんと同じようにほかの

死殻を
残すのではなく
新しい生き方を
与えたい。

Yasuda Koichi

写真：齊藤さだむ

代田の町家

1976年に坂本一成が設計した小住宅。日本の建築家が住宅を通して、新しい思考と哲学を展開させた、70年代の著名な都市住宅のひとつである。銀色の外壁の「家型」が特徴的。坂本一成本人の監修によって、住宅遺産トラストが協力設計者とともに、耐震改修や設備更新、一部オリジナルへの復原などのリニューアル工事を行った。現在、新たな住み手に引き継がれている。

建築家も認知されるようになれば、ヴィンテージ住宅の市場にも変化があるかもしれません。変にブランド志向だけがあると偏屈な感じになるかもしれませんが、質の高い家を大事にする志向につながってくれれば、よい傾向になりそうです。最終的には、設計者の名前に左右されずに、冷静な目で建築の良し悪しを判断できる社会になるとよいですね。

個人的な楽しみでもある

――ヴィンテージ住宅の未来には険しい道もあるようですが、一方で多くの建築家が精力的に、そして前向きに取り組んでいます。

野沢　社会のためだけにやっているわけではないですからね。設計者の都合をいうと、古い建物がどんどん消えてしまうのは、いかにももったいない、とも思っているわけです。自分が名建築を見に行けなくなってしまうから(笑)。冗談のようですが、やはりある時代のすぐれた建築を見に行くのは、ぼくらにとってはすごく楽しいことなんですよ。シュトゥットガルトの「ヴァイセンホーフジードルング」(27／ペーター・ベーレンスほか設計)とか、ブルノの「トゥーゲンハット邸」(30／ミース・ファン・デル・ローエ設計)とか、どこでもよいのですが、そういう古いものを見ながら、「へー」とか、「ほう」とか、思ったりするのですから。経済を優先して建築が取り壊されるのはやむをえないとしても、建築がほとんど無価値だと思われているのだとしたら、自分たちの普段の仕事も無価値だと思われているようで、すごく心が痛むじゃないですか。だから、設計者が感じているような楽しさを、もっと広めたいのです。「私たちの家」だって、やはり多くの人が見に来るのではないですか(笑)。

安田　それは覚悟はしていて、すでに見学会の依頼がたくさん来ています(笑)。こういう住宅を引き継いだわけですから、社会貢献じゃないですが、ある程度は受け入れなくてはならないと思っています。林さんが日建設計の副社長だったときに、ぼくも含めた新入社員10名ほどがこの家に招かれたのですが、そのときにみなで「すごい住宅だ」と思った感動を、今でも鮮明に覚えています。だから、こういう住宅を残そうという発想は、ぼくにとっては、とても自然なことなんです。

野沢　住宅の継承には難しいことがいろいろとあるのですが、それを乗り越えてでも活動できているのは、単純にぼくらの原点や楽しみを守りたいし、伝えたいからでもあります。

野沢正光

Nozawa Masamitsu

のざわ・まさみつ／1944年東京都生まれ。69年東京藝術大学美術学部建築科卒業。70年大高建築設計事務所入所。74年野沢正光建築工房設立。現在、住宅遺産トラスト代表理事、武蔵野美術大学客員教授、横浜国立大学工学部非常勤講師ほか。おもな作品＝「相模原の住宅」(92)、「いわむらかずお絵本の丘美術館」(98)、「木造ドミノ住宅」(2007)、「立川市庁舎新庁舎」(10)。

安田幸一

Yasuda Koichi

やすだ・こういち／1958年神奈川県生まれ。81年東京工業大学工学部建築学科卒業。83年同大学大学院修士課程修了。83〜2002年日建設計。現在、東京工業大学大学院教授、安田アトリエ主宰。博士(学術)。13年林昌二・雅子夫妻の自邸「私たちの家」を改修し、住まい手となる。おもな作品＝「ポーラ美術館」(02)、「大分マリーンパレス水族館『うみたまご』」(04)、「東京工業大学緑が丘1号館レトロフィット」(06)、「ⅢcellⅢ」(12)。

特集／その2

増改築のたすきをつなぐ

小石川の住宅「私たちの家」改修

原設計 林昌二＋林雅子
改修設計 安田幸一

Special Feature
The Future of Vintage Residences

Part 2

Case Study "House in Koishikawa"

林昌二・林雅子夫妻の自邸「私たちの家」は、1955年に竣工して以来、増改築を重ね育ってきた。その住宅を建築家・安田幸一さんが、新たな住まい手として引き継ぎ、増改築のたすきをつないだ。

取材・文／伏見 唯　写真／藤塚光政

1階 居間

居間からデッキ越しに南側の庭を見る。デッキと室内の境は、長辺方向に3本引きの木製引き戸、短辺方向に折れ戸が納まり、L字型に間仕切られる。建具は既存の再利用。

日本の古建築を思い起こせば、古びた風情をひとつのものとして感じてきた建築が、じつは長い時間をかけて少しずつつくられてきたという含蓄に気がつくと、その建築の魅力がいっそう際立って感じられることがある。江戸時代らしい豪奢な龍の彫刻付きの小柱が、建立してから1000年近く後に付加された法隆寺金堂。質素な古代建築を修理する際に、江戸時代らしい意匠を施すことで、そのときの修理箇所をはっきりさせ、むしろ法隆寺の古代性をじゃましないように配慮したものだともいわれている。あるいは桂離宮でもまた、八条宮家の親子二代にわたって、古書院、中書院、楽器の間、新御殿が漸次増築されることで、庭を包むように雁行する有機的な平面が出来上がっている。

こうした魅力は、時を重ねた古建築ならではのものであり、現代の建築にはあまり見られないものだろうなどと考えていたところ、林昌二・雅子夫妻の「私たちの家」があった。1955年、ふたりの結婚を機につくられた「私たちの家」は、2回の増改築を経ることで、およそ増改築でしか生じえない時間を内包した構成になった。

50年代の小住宅

第1期

55年につくられた最初の「私たちの家」は、17・5坪ほどの小さな長方形の住宅。造りも、コンクリートブロックを積んだ壁にコンクリートスラブの屋根をかけた、シンプルなものだった（16ページ）。50年代は、清家清の「森博士の家」（51）や増沢洵の「コアのあるH氏の住まい」（53）などのように、戦後体制下における資材や建坪の規制があるなかでも、数々の名作が生まれた時代であり、「私たちの家」もまた、そうした50年代の小住宅のひとつだった。コンクリートブロックの構造壁と大きな建具が適切に配置され、きびしい制約のもとで生まれた秩序と緊張感が、現代にも通じる合理性となり、名作たらしめている。この頃の「私たちの家」は、後に第1期と呼ばれている。

この第1期を、林昌二は「手持ちのお金とぎりぎりの借金でやっと建てた家でしたから、無駄はもちろん余裕も全くない家でした」（『私の住居・論』、丸善）と述懐しており、林にとって改修や増築の余地のある住宅であった。実際、竣工から9年ほど後に屋根スラブの下に断熱材を貼り、北側に収納部を増築するなど、「少しずつ住まいらしい体裁」が調えられている。

林夫妻の大増築

第2期

そして、竣工から20年以上経った78年、第2期と呼ばれる大きな増改築が行われた。この増改築では、おもに南西の三角形部分と2階全体が増築された。第1期の58㎡（延床面積）が、第2期では238㎡になったのであるから、まさに大増築である。ここまで来ると、いっそ新築でつくったらどうだろうか、という考えも生まれてくる。林昌二は「家というものは、気軽に建て直すべきものではないのではないか。それは、もったいないことであるし、心の安まらないことでもある。なぜ安まらないかといえば、環境の変化そのものでもあるからです」と述べている。

また、第2期では増築の方法も特徴的であった。ふつうに既存部（第1期部分）に2階をのせようとしたところ、建築基準法の改正によって、それは不可と判断されたという。そのため既存部に加重をかけないように木造でキャンティレバーの屋根を差しかけて、2階をつくっている（17ページ）。林昌二自身は、この構造を「おかげで私の好みではない構造的アクロバットが必要となり、家の形もまことに珍妙なものとなりました」と述べている。

しかし、林の大学の後輩であり、日

外観

南庭から見た外観。庭を囲むような平面構成。鉄筋コンクリート造、木造、コンクリートブロック造の混構造である。竣工時は、コンクリートブロック造の矩形平面だったが、増改築を経て複雑な構造と構成になった。

アプローチ

旗竿敷地のため、煉瓦敷きの長いアプローチがある。直進するとカーポート、その奥に庭。右斜め前に進むと玄関に至る。

玄関

玄関扉は、客を迎え入れる内開きのメインドアと、搬出入用に外開きにしてある子扉とが対になっている。手前のガラス戸が子扉で、外へ視線が抜ける。一方で大きな姿見が、居間への視線をゆるやかにさえぎっている。

1階 台所・食堂

台所にある円形の食卓とカウチ。奥に既存テーブルのある食堂。林雅子が好んだ赤色に合わせて、カウチはターコイズの布地に張り替えられた。

建設計の部下であり、「私たちの家」の後継者になった安田幸一さんは、「林さんは制約のなかで新しい創造を見つけるのが好きな人でしたから、この構造の制約も、おそらく発想の源ととらえていたはずです。だからネガティブな要素のように言うこともあるのですが、本当はポジティブな要素だったのだと思います」と語る。第1期、第2期ともに制約が、林の真価を引き出したにちがいない。

1階 台所

キッチンカウンターは、安田さんの改修により、天板をダークブラウンに塗装し、戸棚をシナベニヤにすることで色調が明るい印象に変わった。

そして、「私たちの家」を継承した安田幸一さんは、いわば第3期へたすきをつないだ。

「私たちの家」から「小石川の住宅」へ

林夫妻の亡き後、「私たちの家」は住み手もなく放置されていた。それを忍びなく思っていた遺族が買い手を探していたところから、安田さんが引き受けることになった。どうやら、「何かあれば東工大の先生（安田さん）を頼るように」という林の遺言があったようである。

安田さんが引き受けたということは、「私たちの家」は建築家・安田幸一の自邸になる。建築家にとって自邸というものは、施主のことを気にせずに自分の建築哲学を実現する貴重なチャンスだが、安田さんはそれを改修でよしとした。「ぼくは卒業設計も改修作品で提出しましたし、昔から新築と改修のあいだに境を感じていません。諸条件を読み取り、解を導くのが設計であって、改修のときにはたまたま既存建物があるだけです」と安田さん。

さらに安田さんには、「私たちの家」を引き継ぐにあたって、ある決意があった。それは敬愛する林昌二と林雅子の建築を、時には改変する、という決意である。住宅の設備や構造などは、必要とあれば更新しなくてはならないし、住む人が違えばライフスタイルの違いも露わになるだろう。住宅を住宅として引き継ぐ以上、文化財や博物館展示のようにオリジナル保存ができるわけではない、という宿命もある。保存に義務を感じたら住めないと感じた安田さんは、「林さんには本当に申しわけないけれど、もし自分がこうしたいという希望が生まれたら改修させていただきたいし、自由に増築もさせてもらいたい」と語る。そうした決意とともに安田さんは、「私たちの家」はすで

2階 屋根裏部屋

赤い天井と壁の屋根裏部屋。1978年当時、1階の既存躯体に負荷をかけないように、木造の屋根が片持ちで差しかけられた。空調は更新ずみ。

に自分たちの家であるわけだから、住宅の名称を「小石川の住宅」にあらためた。

保存も改変も選択次第

しかし、「小石川の住宅」では水まわりや空調の設備の更新はされているものの、一見したところ劇的に変化した部分が際立っているわけではない。むしろ、オリジナルを尊重し、維持しようとの意志が散見される。たとえば、食堂の床材は元のチーク材を再利用し、一度床材をはがすときには、元の状態に戻せるように、一つひとつの材料に番号を付すという徹底ぶりだ。

これに対し安田さんは、「『残す』という行為も選択肢のひとつだったということです。床のチーク材については、なにも徹底的に保存をしたかったわけではなくて、薄皮一枚はぐだけで新品同様になる貴重な無垢材なので再利用したのです。林さんがもともとそうした更新の可能性を仕込んでいたわけですから、それをわざわざ変える必要はなかった」。またデッキのデザインについては、「材料が根こそぎ腐っていましたから、すべて新品にしましたが、それを機にデザインを変えようとは思いませんでした。元のデザインが非常に庭に合っていましたから、迷いなくオリジナルを『残す』という選択をしました」と話す。

つまり安田さんは、林夫妻や既存の建物を尊重しているのであり、保存という選択肢も創造行為に含まれているのである。保存も改変も選択次第、確かにそれが本来あるべき自由な創造といえよう。

2階 書斎

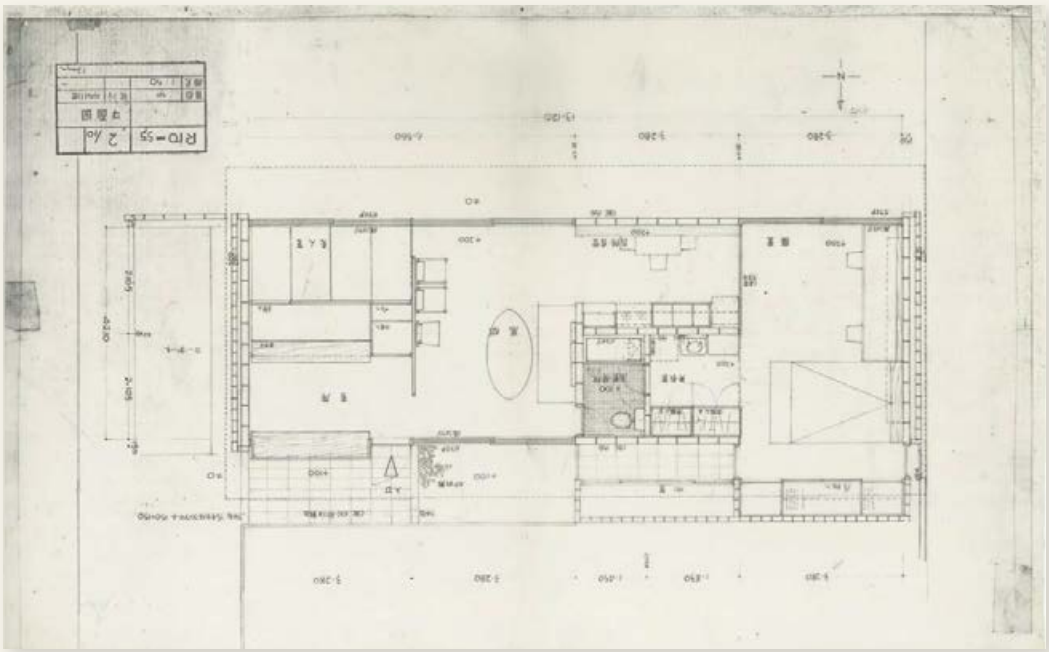
座卓が造り付けられた書斎。床はカーペット敷き。正面のスチールサッシは、日建設計の飯田橋本社にも使われていた大型のもの。横すべり出し窓。

古建築に通じる美学

古建築に対して、近代以降の建築に私性が垣間見えるのは、長い時間の積み重ねを感じないときだ。逆に時間をかけてつくられたものには、その時々のいろいろな考えが詰め込まれている。それは、実際に長い時間を積み重ねている古建築の特権かと思っていたが、そうではなかった。「私たちの家」あらため「小石川の住宅」は、今後も多くの考えを吸収し、変化していくだろう。その変化の総体を振り返ったときに、時間を引き連れた建築が、現前するにちがいない。

竣工時（1955年）の原図

※9年後の第1.5期の増改築も加筆されている



第1期の平面図

0 1 2m 1/150 N

※左ページの図面に合わせて、
原図の天地を180度回転している。

第1期の模型

計画時につくられた石膏の模型。コンクリートブロックの軀体と水平なコンクリートスラブが明瞭に伝わる。植野石膏模型製作所によるものか。

第1期の写真

南側の庭から老人室と居間を見る。水平のコンクリートスラブが印象的。平屋の第１期の写真だが、撮影者は不明（写真提供／安田幸一）。

林夫妻による竣工時の図面と増改築時の図面

「私たちの家」の図面は、林昌二・雅子夫妻が所有しており、住宅とともに安田幸一さんに継承された。竣工時（1955年）の図面を見ると、最初のオリジナルは、4,210㎜×13,120㎜の矩形平面であったことがわかる。軀体はコンクリートブロック。軀体以外の部分は引き違い戸（「紙ショウジ」+「ガラス戸」）であり、開放的な造りになっている。

竣工から９年後に第1.5期ともいわれる増改築が行われるが、その増改築の設計図は、55年の図面に加筆されている。第1.5期には、北側への収納（「洋服入」+「物置」）の増築などが行われた。

78年には、大規模な増改築を経て第２期が竣工する。南側に大きなテラスや三角形平面の食堂と台所が増築されるとともに、２階がつくられている。また第1.5期に増築された収納部分は、水まわりスペースになり、反対にもともとの浴室・トイレのスペースが納戸になった。第１期の図面のように、通常平面図は北を上にするが、第２期の図面では玄関を重視して南を上にしている。

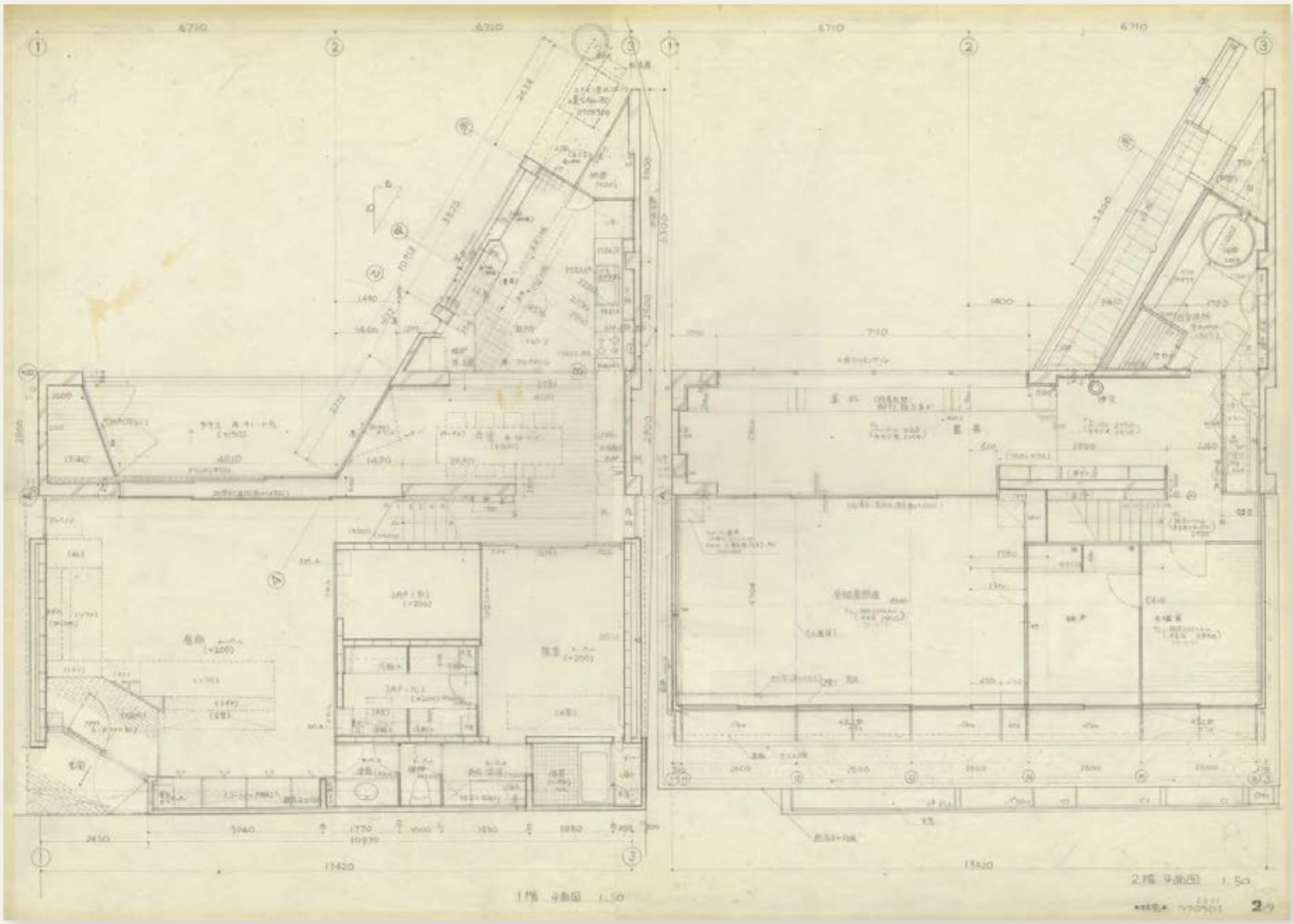
林 昌二
Hayashi Shoji

はやし・しょうじ／1928年東京都生まれ。53年東京工業大学工学部建築学科卒業後、日建設計工務（現・日建設計）。55年林雅子と結婚。80年日建設計副社長就任、後に名誉顧問。2011年逝去。おもな作品＝「パレスサイドビルディング」（1966）、「ポーラ五反田ビル」（71）、「新宿NSビル」（82）など。

林 雅子
Hayashi Masako

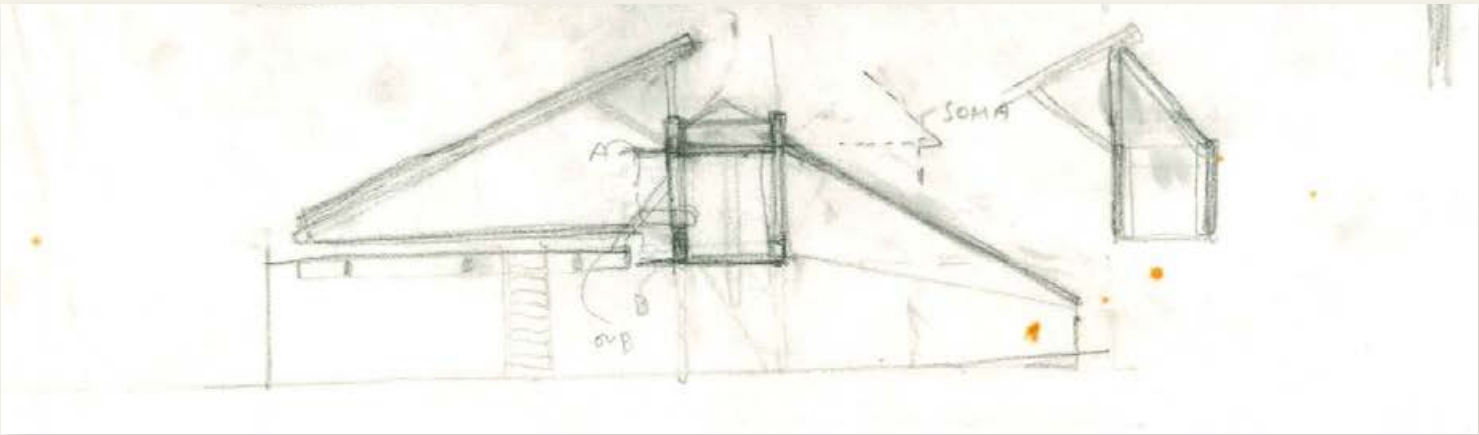
はやし・まさこ／1928年北海道生まれ。51年日本女子大学家政学部芸術科住居専攻卒業、研究生として東京工業大学清家清研究室所属。55年林昌二と結婚。58年林・山田・中原設計同人設立。2001年逝去。おもな作品＝「Oさんのすまい」（52）、「崖の家」（75）、「ギャラリーをもつ家」（83）など。

増改築時（1978年）の原図



第2期の平面図

0 1 2m 1/150 N



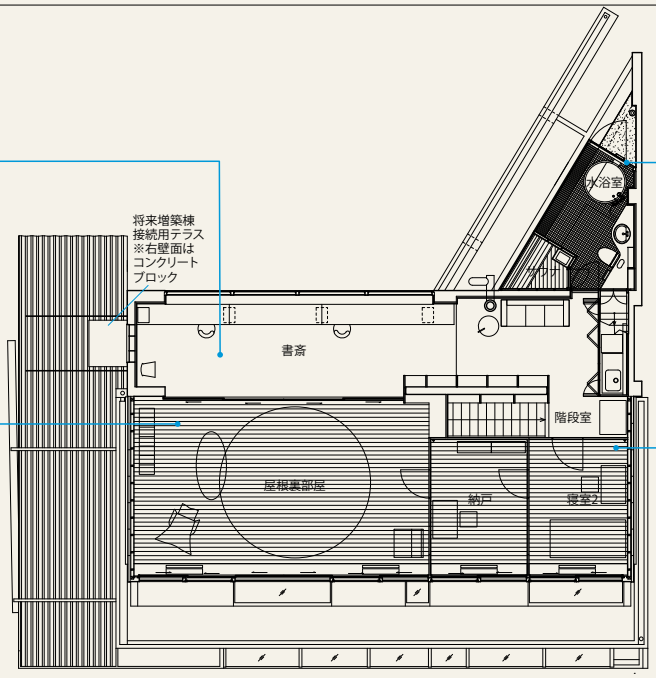
構造を検討したスケッチ

第１期のコンクリートブロック造に負荷をかけないようにした、片持ちの木造屋根。構造家・温品（ぬくしな）鳳治（ほうじ）とともに、構造が何案も検討された。

安田幸一さんによる2013年の改修

2階平面図

0 1 2m
1/200



書斎の内装仕上げを改修

床／カーペット
床暖房設置
壁・天井／EP
机の既存集成材
天板を保存
（研磨のうえ、
ワックス塗布）

屋根裏部屋の内装仕上げを改修

床／既存ヒノキ
フローリング保存
（研磨のうえ、ワックス塗布）
壁／EP
天井／
セン合板染色塗装（朱赤）
空調および吹出し口を新設
建具調整

水浴室の内装仕上げを改修

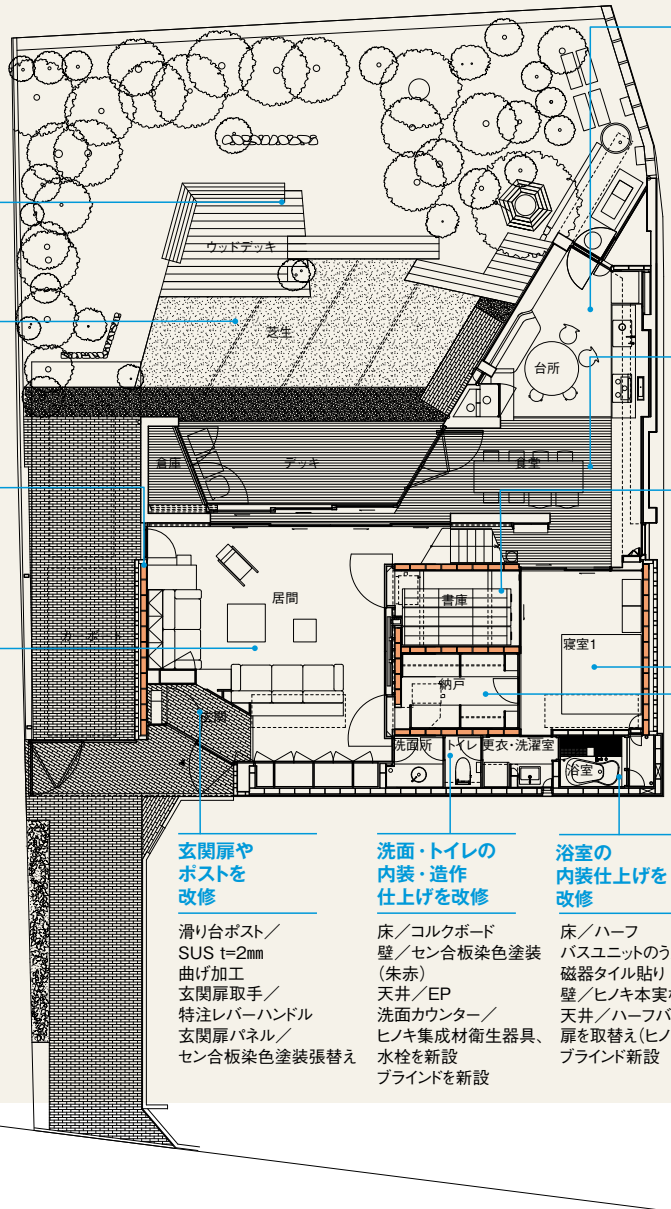
床／ガラス製モザイクタイル貼り
色目地
壁・天井／
ヒノキ板張り
衛生器具、
水栓を更新

寝室2、納戸の内装仕上げを改修

床／既存ヒノキ
フローリング保存
（研磨のうえ、ワックス塗布）
壁／EP
天井／セン合板染色塗装
（朱赤）

1階平面図

0 1 2m
1/200



オリジナルを参考に新設ベイスギ防腐含浸処理

芝生新規張り土壌改良配水パイプ設置

線部は、第1期（1955）のコンクリートブロック壁

居間の内装・家具・造作仕上げを改修

床／カーペット
床暖房設置
壁／漆喰塗り
天井／EP
クロゼット／
セン合板染色塗装（朱赤）
パネル扉／布（ネル下地
のうえ、麻しわ加工）張り
ソファ／生地張替え
書庫・納戸上部に
空調機を新設
既存の空調機を
撤去後に収納を新設
トップライトの
アクリル板を取り替え
建具（障子）の歪みを調整

台所の内装・家具造作仕上げを改修

床／コルクボード
壁／化粧打放し
コンクリート清掃
天井／EP
キッチンカウンター／
ベイヒバ無垢板OP
戸棚／シナベニヤ張り
カウチ／生地張替え

食堂の内装仕上げを改修

床／既存チーク
フローリング保存
（研磨のうえ、
ワックス塗布）
床暖房設置
壁／化粧打放し
コンクリート清掃
天井／EP

書庫の内装仕上げを改修

床／ビニルシート
壁・天井／EP
集密書架を更新

寝室の内装仕上げを改修

床／カーペット
壁・天井／EP
トップライトの
アクリル板を
取替え建具（襖）を
布張りへ

納戸の内装仕上げを改修

床／カーペット
天井／EP
収納のポール、
ラワンフラッシュボードを
取替え、修繕

玄関扉やポストを改修

滑り台ポスト／
SUS t=2mm
曲げ加工
玄関扉取手／
特注レバーハンドル
玄関扉パネル／
セン合板染色塗装張替え

洗面・トイレの内装・造作仕上げを改修

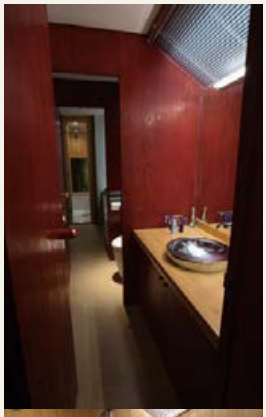
床／コルクボード
壁／セン合板染色塗装
（朱赤）
天井／EP
洗面カウンター／
ヒノキ集成材衛生器具、
水栓を新設
ブラインドを新設

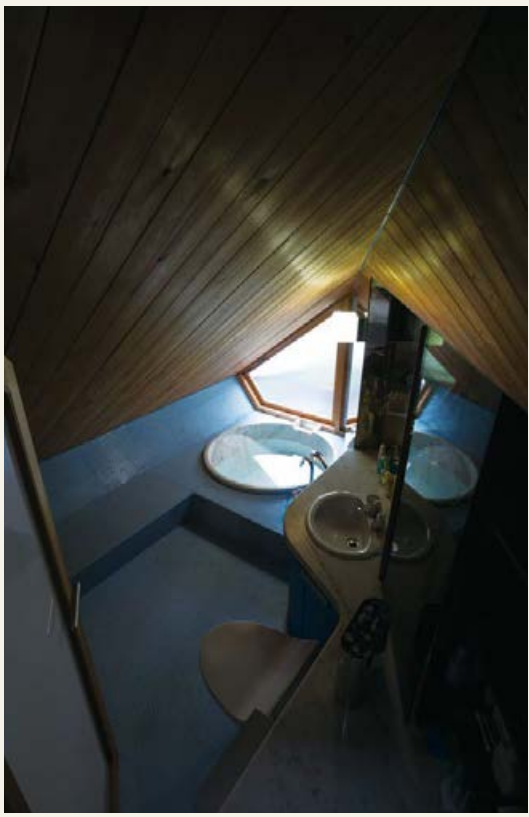
浴室の内装仕上げを改修

床／ハーフ
バスユニットのうえ
磁器タイル貼り
壁／ヒノキ本実板
天井／ハーフバスユニット
扉を取替え（ヒノキ框扉）
ブラインド新設

「小石川の住宅」
(「私たちの家」改修)

建築概要	
所在地	東京都文京区
主要用途	専用住宅
家族構成	夫婦+子ども1人
原設計	林昌二+林雅子
改修設計	安田幸一
構造	鉄筋コンクリート造、木造、コンクリートブロック造
施工	栄建社
階数	地上2階、塔屋1階
敷地面積	369㎡
建築面積	143㎡
延床面積	238㎡
設計期間	2013年3月〜5月
工事期間	2013年6月〜8月
おもな外部仕上げ	
屋根	ウレタン塗布防水(RC部分)、
	ロールアルミニウム板竪はぜ葺き(木造部分)
外壁	化粧打放しコンクリート、一部押出成型セメント板
開口部	スチール鉄具、木製建具補修、
	ブラインド内蔵断熱アルミサッシ
外構	チーク縁甲板張り補修(テラス)
おもな内部仕上げ	
1階居間・玄関	
床	カーペット
壁	センロールベニヤ染色補修(北面収納扉)、
	漆喰左官仕上げ(西面)、
	ネル下地麻布張り(東面収納)
天窓	乳白アクリル板 t=5㎜ 蛍光灯内蔵
建築金物	SUSレバーハンドル(特注品)
1階台所・食堂	
床	コルク スーパーセラミック仕上げ(台所)、
	チーク縁甲板張り研磨のうえ、ワックス(食堂)
壁	化粧打放しコンクリート
台所天板	ベイヒバ無垢板 t=40㎜ OP拭取り後CL塗装、
	一部SUS PL 3.0㎜HL、
	SUS PL 2.0㎜曲げ加工 R=25㎜(シンク部)
1階寝室1	
床	カーペット
壁	PB EP、麻混クロス(収納扉)
天窓	乳白アクリル板 t=5㎜ 蛍光灯内蔵
1階浴室	
床	モザイクタイル貼り
壁・天井	ヒノキ縁甲板張り
1階トイレ・洗面所	
床	コルク スーパーセラミック仕上げ
壁・天井	PB EP、センロールベニヤ染色補修
2階屋根裏部屋・	
寝室2・納戸	
床	ヒノキフローリング研磨のうえ、ワックス
壁	PB EP
天井	センロールベニヤ染色補修
2階書斎	
床	カーペット
壁	PB EP、化粧打放しコンクリート、
	耐熱モルタルEP(煙突)
2階水浴室	
床	10㎜角ガラス製モザイクタイル貼り
壁・天井	ヒノキ縁甲板
1階全室・2階書斎	
天井	PB EP





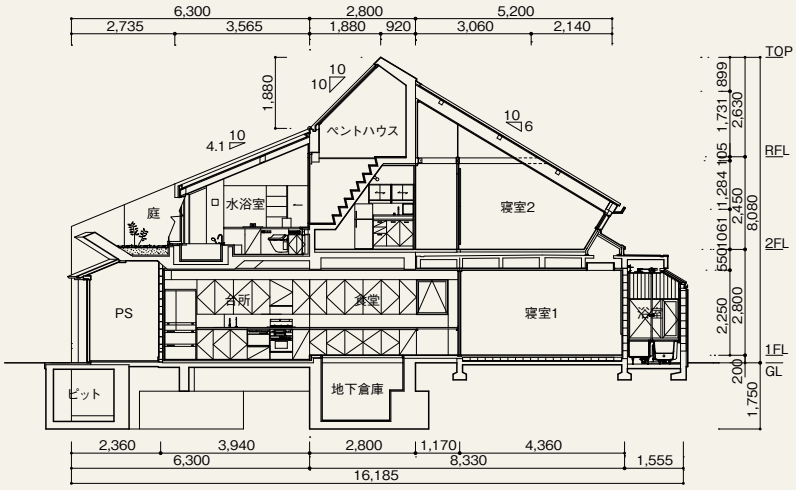
写真右／2階の水浴室。左上／1階の水まわりが一直線に連なる。左下／1階の浴室。TOTOのHalf Bath 08（特別改造品）。

水まわり

断面図

0 1 2m

1/200



湘南茅ヶ崎の家

原設計　吉村順三

改修設計　樋口善信

引き継ぐ決断と意志

1967年に建てられた吉村順三設計の住宅が、
改修され、新たな住まい手が暮らしている。
その住まい手と改修設計者には、吉村を理解し、
引き継ぐ、強い意志があった。

取材・文／伊藤公文　写真／傍島利浩

Special Feature
The Future of Vintage Residences

Part 3

Case Study "House in Shonan Chigasaki"

2階 食堂・居間

「吉村障子」が印象的な空間。「吉村障子」は縦横の框と組子の見付け寸法を統一し、障子を閉めたときに、まるで一枚の障子のように見えるデザインになっている。

2階 食堂

食堂と居間は低いカウンターでゆるく区切られている。障子や建具を閉めると２室の空間になる。

古典『韓非子』に引かれた故事。皇帝に何が描きやすく、何が描きにくいかをたずねられた画家は「犬難（いぬはかたし）、鬼易（おにはやすし）」と答えた。犬は誰もが見慣れた動物なので、凡庸を超えた描写をなして評価を得るのは並大抵ではないが、鬼を見た人はいないのだから、自由勝手に描くことができ、それなりの独創として評価されやすいということだろう。

この伝でいうと、吉村順三はひたすらに犬をつくり続けた建築家のひとりにちがいない。その点で彼は、小さな住宅から高級旅館、高層ビル、さらには宮殿に至るまで、一度たりとも道をはずれたことはなかった。１９７０年代の日本では日常の生活の場である小住宅においてさえ、鬼をつくってはもてはやす風潮が高まったが、そこでもなお吉村はそうした風潮と無縁なところに身を置き、迷いなく創作活動を続けたのだった。

持続する強固な意志

67年竣工の「湘南茅ヶ崎の家」。ゴルフ場に直に接する南斜面。今でこそ前面の建物にややさえぎられているものの、湘南の海を望む絶好の立地。1階がRC造、2階が木造、４７０㎡の豪壮な邸宅だが、地形を生かした配置、抑制した階高・軒高、ライズの低い屋根により、ひっそりと沈み込むようなたたずまいとなっている。建築主によって92年になされた設備関係の大改修を含め、たびたび手が入れられていたが、原形はほとんどとどめられていた。その後、住み手がいなくなり、取り壊しの危機もあったというが、幸運にも熊澤茂吉さんという引き受け手が現れ、２００８年に改修が終わり、現在に至っている。

この場合、「犬と鬼」の故事はつくり手だけではなく、購入し、使用し、維持する側にもあてはまる。なぜならば、この住宅を評価し、購入し、改修を差配し、庭を含めた諸々の果てのない手入れをしていこうと決断することは、瞬発的な山っ気から遠く離れ、対象の美点を見抜き、長く大切に扱っていこうとする持続的で強固な意志が求められるからだ。

引き継ぎの四カ条

第一に、感性の共振があった。熊澤さんは、ニューヨーク、あるいは東京でたまたま目にした建築に魅かれて調べてみると、吉村順三の設計だったことが何度もあったという。鬼である建築の特質を見抜くのは容易としても、吉村順三の建築を初見で察するとは、よほど吉村と近い感性の持ち主である。この住宅に住むことにしてから、吉村の建築にさらに関心が高まり、探究していくうちに、建築の空間はもちろんのこと、吉村の設計者としての生き様にも共感するようになったそうだ。

第二に、執念があった。この住宅の購入の話が最初にあったときには、決断に至らなかったという。なぜわざわざ古い家をという家族の反対もあった。

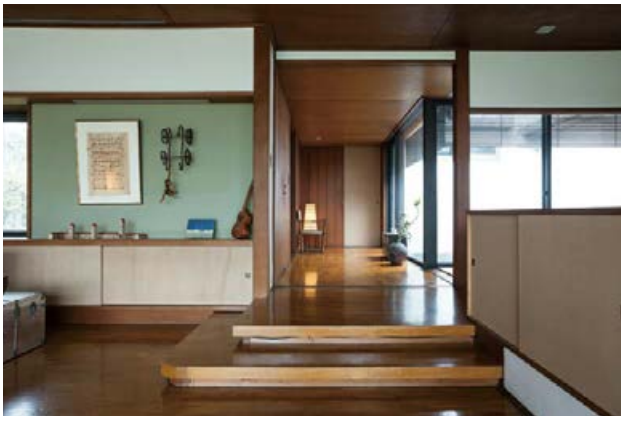
2階 居間

障子は壁の中に引き込むことができる。フルハイトのガラス戸が庭への開放性を高めている。

しかし頭から離れることはなく、実際に何度か足を運ぶうちにどうしても手に入れたいと思うようになり、家族を説得して購入にこぎつけた。そうして想いが結実するのに4年、さらに改修して住むまでには2年あまりが経過していた。時間が金に換算されるのが通例の世の中では稀有なことだろう。

第三に、公共性への理解があった。住宅は個人の所有物であり、日常の生活の場なのだから、原則として社会に開く必要はない。けれども生涯で237もの住宅を設計した稀有な建築家である吉村順三の、なかでも名作と定評がある住宅を保有し、改修し、住み継ぐにあたっては、ある範囲の人びとに対して、経過を明示し、公開する社会的義務を負うと熊澤さんは考えたのである。すこぶるまっとうでありながら、実行はきわめて難しいことだ。実際、改修前に吉村順三設計事務所のOBや日本建築家協会（JIA）の有志、およそ200人ほどが見学会に参加し、改修後はさらに多くの人が訪れているという。

第四に、実務的な経験と知識があった。熊澤さんは日本酒の蔵元であり、湘南唯一の蔵元熊澤酒造の代表で、「湘南茅ヶ崎の家」の近くの蔵元敷地内に酒蔵のほか、点在する既存の古建物を利活用したり、新たに地域の歴史的建造物を移築して、飲食店やギャラリーなどを運営している。古い空間や素材を新たな視点から見直し、利用し、価値を高めていくことを実践してきたのだ。その経験と知識が「湘南茅ヶ崎の家」の再生に生かされているのは間違いない。



2階 ホール

左奥の玄関から入ると、中庭が見えるホールへ。そこから各室に至る。奥にある扉からは台所への裏動線、手前右手には食堂。居間の床面はホールより240㎜ほど下がる。

オリジナルのとおりに改修設計

改修の設計は、原設計者につながりをもたない人で、すでに熊澤さんと一

緒に仕事をしたことがある人という基準で樋口善信さんが担当することになった。樋口さんにとっては口では言い表せないような重圧だっただろうが、原案に忠実に最小限の改修を行うという明確な指針と新世帯からの信頼が重圧を軽減したという。

改修前は夫婦ふたり住まい、2階が玄関、居間、食堂、台所、寝室、1階がゲスト用のホール、宿泊室、それに使用人室という構成だったが、改修後は2階に夫婦と子どもふたりの世帯が、1階に親夫婦が住む2世帯となる。そのため、2階は茶の間、化粧室を子ども室に用途変更したのみだが、1階は客間和室に仏壇を新設したほか、ホールを居間に、使用人室まわりを食堂・台所に変更している。

そのほかは仕上げ、設備とも傷みを修繕するというスタンス。外壁と軒裏の補修、煙突の再塗装、1階の一部の床の張り替えや壁仕上げの塗り替え、2階浴室の機器更新・改修、2階台所のカウンター改造と洗面台増設など。

最大の改修といえば、2階部分の耐震性能向上のために、南北方向の壁面の筋かい数カ所を置き換えて補強し、さらに東西方向の壁面2カ所に新たに筋かいを補強していることである。

これらを総じて、改修前と寸分たがわぬと断定しても差し支えない状態に仕上がっているといえよう。それには面積の十分なゆとりが大きく寄与している。とくに台所がそうだ。もともとプロの料理人が複数で使用することを前提にした2階の広大な台所は、夫人の要望で改修の選択肢もあったが、とりあえずカウンターを高くする程度の改造ですませておいたところ、親子4人が一緒に食事ができるスペースもとれ、洗濯コーナー、勝手口、納戸と一体となっているので、家事のすべてを行うことができ、結果として居間、食堂をいつもきれいに保っておけ、とても使い勝手がよいことがわかったという。それは新設した1階の台所も同様で、食堂と一体となり、夫婦ふたりの生活の場として十分な広さで、それゆえに居間や和室が雑然となることがない。もちろんそれだけではなく、全周に深くまわした庇、回遊性に富んだ使いやすい平面、当時最高レベルの設備計画と設備機器、耐久性にすぐれた素材の選定と丁寧な施工、原設計者によって続けられてきた丹念な修繕などの総合的な賜物であるにちがいない。

2階 子ども室

旧化粧室や旧茶の間は、子ども室として使われている。正面奥の袖壁は、耐震補強された箇所。

写真右ページ上／約6,000㎜角ほどもある大きな台所と洗濯室。25ページ／大型のアイランドキッチンは、今も日常的に使われている。床のモザイクもオリジナル。

2階 台所

ゴルフ場の近くで客をもてなすためのゲストハウス

左２点は1966年10月12日の日付けが記されたオリジナルの原図。東京藝術大学大学美術館に所蔵されているが、吉村順三記念ギャラリーにも複写が保管されている。

１階は鉄筋コンクリート造、２階は木造の住宅である。平面を見ると、おおよそ正方形の組み合わせで全体を構成していることがわかる。居間は7,200㎜角である。

建物名称のところに、「S.S.クラブ設計図」とある。「湘南茅ヶ崎の家」の近隣には大きなゴルフ場があり、ホールをまわった客をもてなすために、大人数の来客を想定したゲストハウスだった。２階の大きなアイランドキッチンを備えた台所では、料理人が腕をふるって大勢の客をもてなしたという。１階には使用人のための居室、台所、浴室があり、裏動線で２階の台所ともつながっている。

メインの玄関は２階にあるが、ガレージ奥には１階への入り口もある。ゴルフ帰りに車を車庫に入れた後、すぐに１階の石敷きのホールへ客を招き入れることができた。

個人宅というよりは、客と過ごすためのサロンのような性格の強い住宅だったという。

南の庭側から見た外観。テラスは伊豆石貼り。ゴルフ場をまわった後、このテラスや居間でゴルファーたちが歓談をしていたという。

庭側外観 ↓

西側の正面。玄関は石階段を上った２階にある。ガレージの奥には親世帯の住居となった１階の玄関もある。銀色の円筒は暖炉の煙突。

↑ 正面外観

言葉を寄せつけない空間

こうして「湘南茅ヶ崎の家」は蘇り、住み継がれている。２階のホールから食堂、居間へと展開する天井高２２６０㎜から２５２０㎜の流麗な空間、例の暗色に塗られたラワンベニヤの天井の不可思議な効果、あるべき細部があるべき形に納まっている快適さ、機能上から自然に導かれた仕掛けなどについて言葉を費やすことはやめよう。吉村順三の住宅の内部空間が言葉を寄せつけない事実はあまねく指摘されて久しい。言葉を尽くすほどに実体から遠ざかって虚しさが募り、逆に言葉を選ぶほどに「居心地のよさ」といった凡庸な表現に陥らざるをえないからだ。

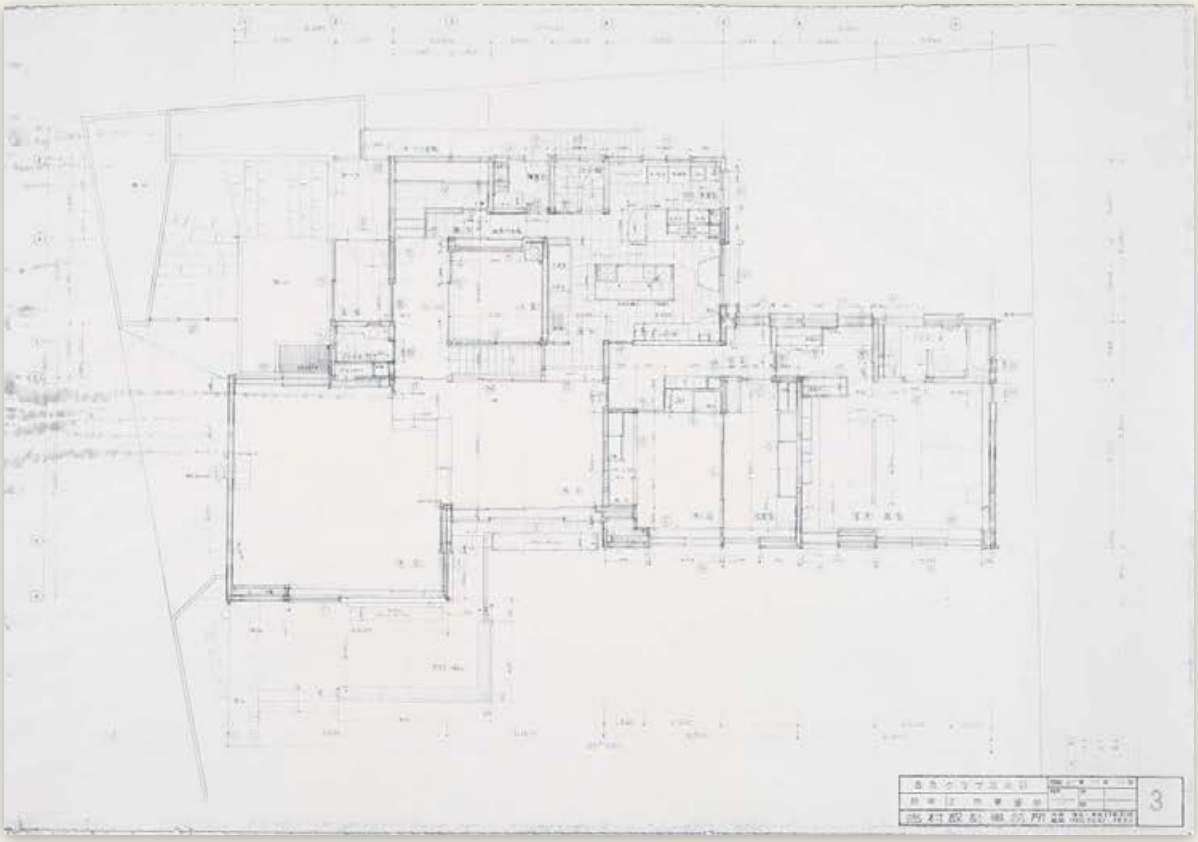
ただし、１階の改修された居間が、築山に半ば隠され、前面の池の揺らぐ反射光とあいまって、深い洞窟に潜むような安寧をもたらす空間になっていることは、２階の明朗で透明な空間との対比において印象的だったことだけは記しておきたい。

吉村順三

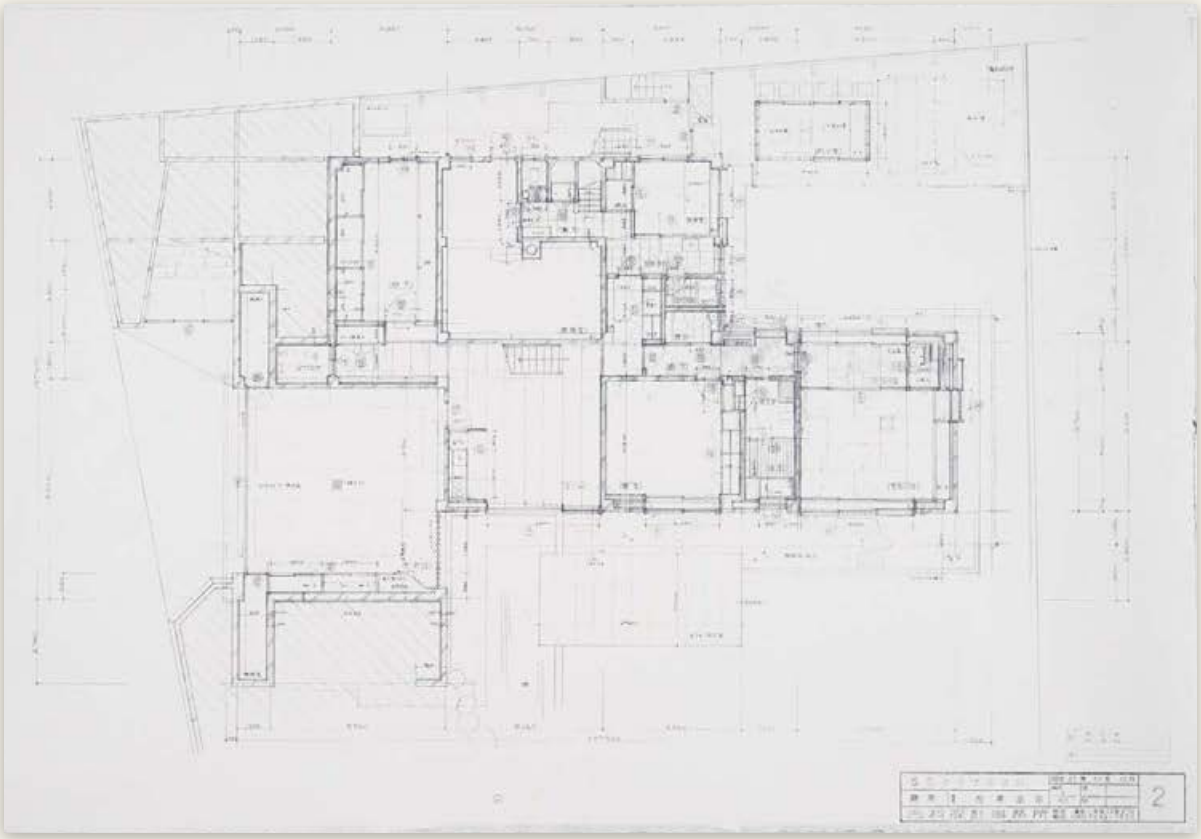
Yoshimura Junzo

よしむら・じゅんぞう／1908年東京都生まれ。31年東京美術学校（現・東京藝術大学美術学部）建築科卒業。31年レーモンド建築設計事務所入所。41年吉村設計事務所設立。45年東京美術学校助教授。62年東京藝術大学建築科教授、後に名誉教授。97年逝去。おもな作品＝「NCRビル」(62)、「軽井沢の山荘」(62)、「奈良国立博物館」(74) など。

竣工時（1967年）の原図



2階平面図



1階平面図

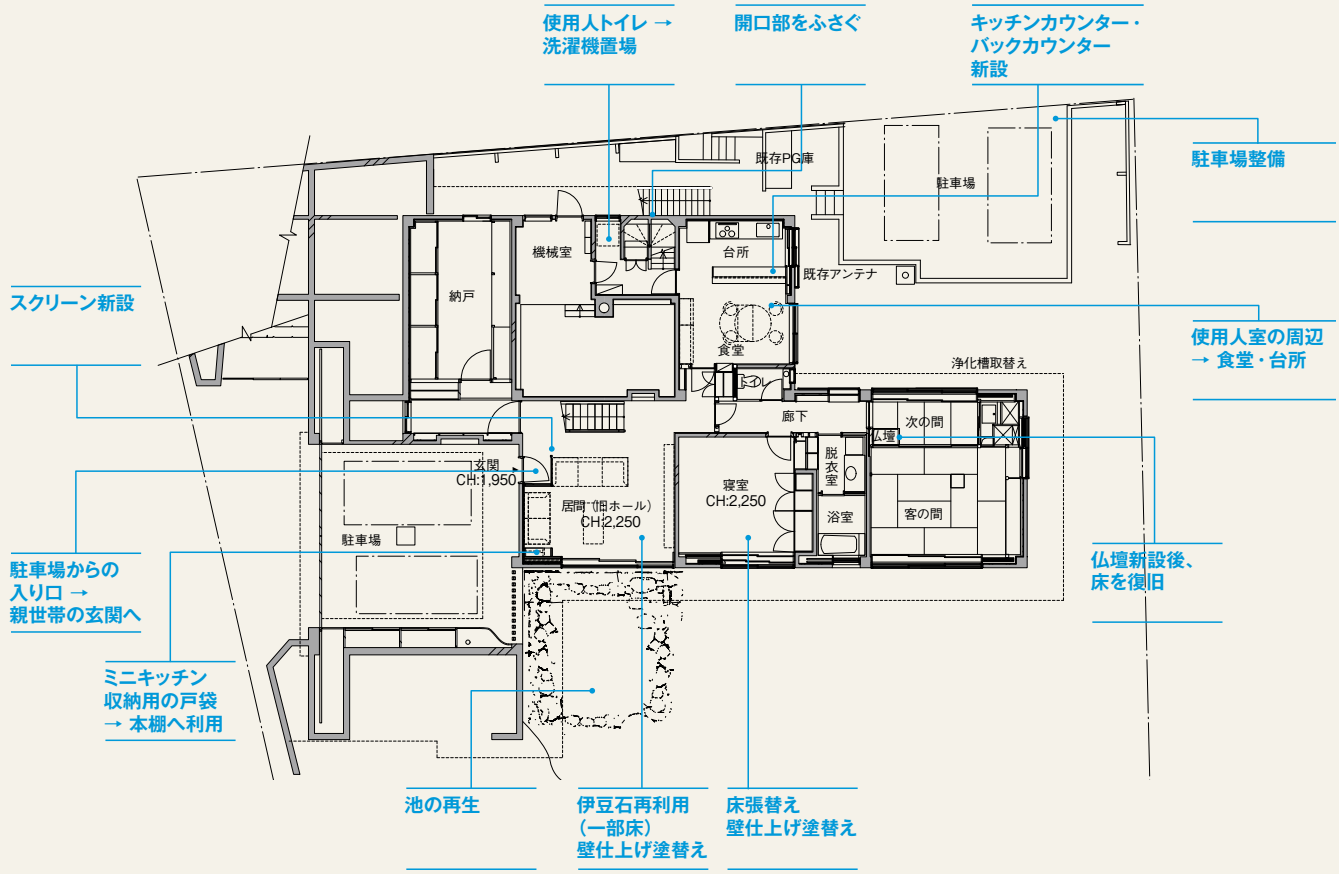
0 1 2m 1/250 N

樋口善信さんによる2008年の改修

※2009年以降の改修も記載

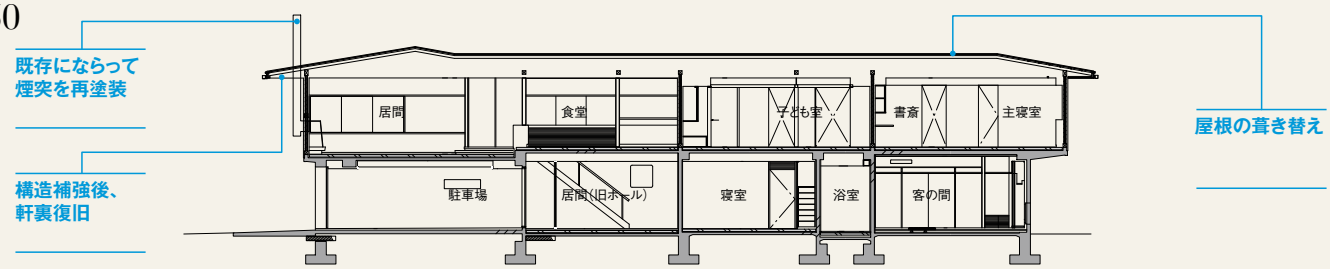
1階 平面図

0 1 2m
1/250



東西断面図

0 1 2m
1/250



1階 食堂・台所

使用人のための居室、台所、浴室が、二世帯住宅に変更されるにあたって、親世帯の食堂と台所に改修された。隣室のサービス階段から子世帯の２階へ至る。

アプローチ

道路から石階段を上り、曲がったところでポーチに至る。さらに軒下のポーチと、奥の広い玄関室の深い懐が、住まい手や客を出迎える。考えぬかれたシークエンス。

「湘南茅ヶ崎の家」

建築概要	
所在地	神奈川県茅ヶ崎市
主要用途	専用住宅(2世帯住宅)
家族構成	親世帯夫婦+子世帯夫婦+子ども2人
原設計	吉村順三
改修設計	樋口善信／樋口善信建築設計事務所
構造設計	船戸構造設計
構造	鉄筋コンクリート造(1階)、木造(2階)
施工	横浜テクノ建設
階数	地上2階
敷地面積	934.35㎡
建築面積	259.78㎡
延床面積	471.16㎡
設計期間	2007年7月〜12月
工事期間	2008年1月〜4月

おもな外部仕上げ	
屋根	アルミ t=0.4㎜
	瓦棒葺き(@240㎜)
壁	リシン掻き落し

おもな内部仕上げ	
天井	ラワンベニヤ
壁	漆喰、チーク突板(@4尺)
床	絨毯、伊豆石

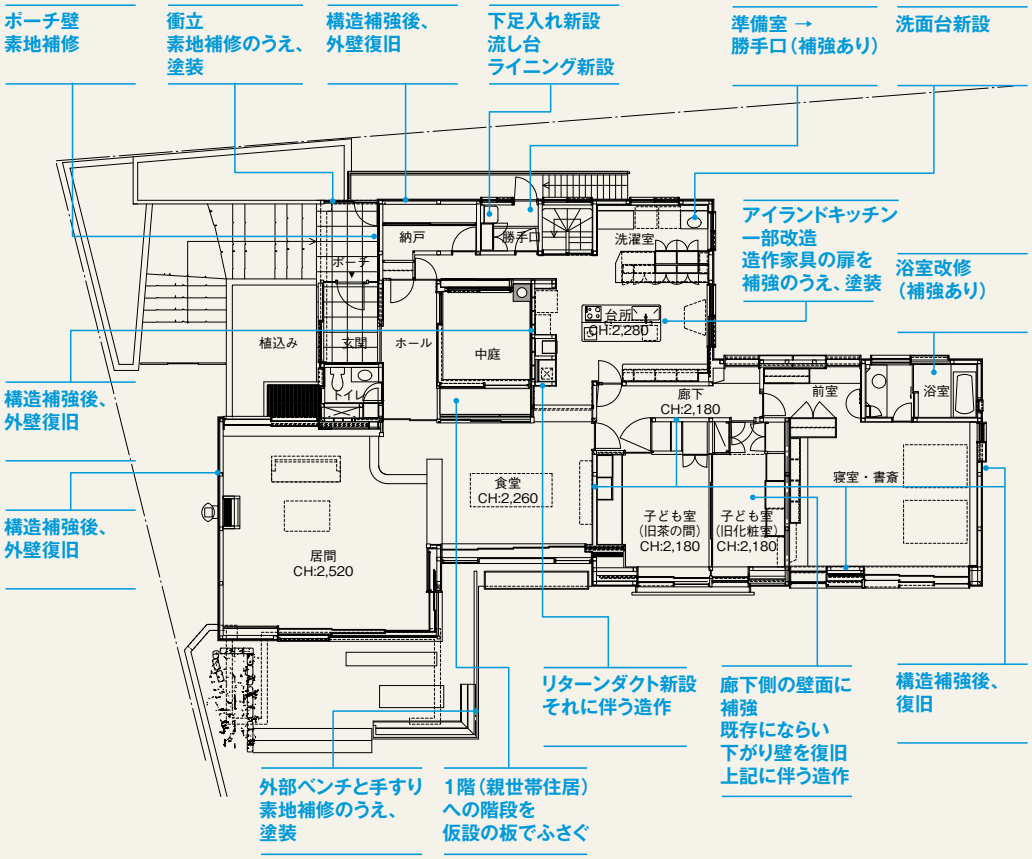
樋口善信

Higuchi Yoshinobu

ひぐち・よしのぶ／1969年神奈川県生まれ。94年千葉工業大学大学院修了。同年洋建築企画。2004年樋口善信建築計画事務所設立。現在、千葉工業大学建築都市環境学科非常勤講師。おもな作品＝「山中庵」(06)、「深い軒裏をもつ家」(09)。

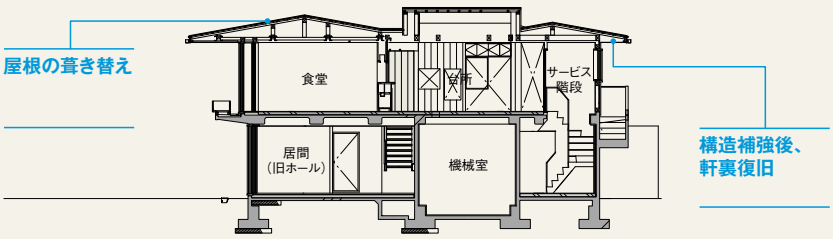
2階 平面図

0 1 2m
1/250



南北断面図

0 1 2m
1/250



1階 居間
(旧ホール)

元はゴルフ場帰りに車庫からそのまま客を招く空間。現在は、親世帯の玄関と居間になっている。右奥にあったミニキッチンは撤去され、ソファや本棚が置かれている。

木部現しのレーモンドらしい住宅。柱、梁、2階の床材などの内側の部材は劣化が少なく、当初材が残っている。家具の多くは、妻のノエミ・レーモンドのデザイン。

1階 リビング・ダイニング

OKA MASAKAZU HOUSE

原設計　アントニン・レーモンド

改修設計　元良信彦

復原にも創作を

1934年にアントニン・レーモンドによってつくられた住宅。
素木による軽井沢らしいこの住宅は、何十年もの時を経て、
原型をとどめないほどに改修されていた。
その住宅が、創意をもって復原された。

取材・文／豊田正弘　写真／川辺明伸

Special Feature
The Future of Vintage Residences

Part 4

Case Study
"OKA MASAKAZU HOUSE"

74年前の姿に戻す

この改修の前、別邸の姿を眼前にした建築家は衝撃を受ける。大幅な増改築が、意匠・使い勝手ともに大きなダメージを与えていたのだ。外壁にはモルタルが塗られ、開口部は味気ないアルミサッシで覆われ、まわりの緑への視線を塞ぐように和室やボイラー室が増築されていた。レーモンドの設計による住宅とは、話を聞くまでは想像もできなかっただろう。

アントニン・レーモンドは数多くのモダニズム建築を設計し、日本建築界に大きな足跡を残した。そして軽井沢の地にあっては、観光名所となった「聖パウロ教会」(35)、自らの「夏の家（現・ペイネ美術館）」(33)をはじめとする「軽井沢式」と呼ばれる別荘群などにより、日本を代表する避暑地のイメージづくりに寄与している。

岡庄五氏の依頼によるこの別邸も、そうした別荘群のひとつとして1934年に竣工した。それが前記の状況に至ったのは、「夏の家」から「1年中の家」になったため。軽井沢の冬はきびしい。夏の清涼な気候を前提とした住宅にとって、防寒仕様を求められるのは酷なことだったにちがいない。

今回の改修にあたり、岡氏の関係者である建主さんからは元良信彦さんにふたつの条件が提示された。それはまさにヴィンテージ住宅を未来に引き継ぐためのテーマといえよう。

1、別邸は将来にわたる利用方法を考慮したうえで可能な限りオリジナルに戻すこと。

2、隣接するふたつの敷地、母屋と呼ばれる建物を含む部分と原生林を含めた計画とすること。

レーモンドとの対話

ひとつ目の条件に対し、竣工当時の資料で見つかったのはモノクロ写真が内外1点ずつ、図面が簡単な平面図・立面図・断面図と暖炉の詳細図。レーモンド設計事務所の協力を得てもそれだけだった。そこで元良さんは、長い付き合いで「手」を知る工務店のベテラン大工を集める。図面では知りえないかつての工法や納まりを、相談しながらつくっていくためだ。76歳の棟梁をはじめ60代の大工たちは、造りのよく似たペイネ美術館を一緒に見学した後、隣接するログハウスに5カ月にわたって住み込み、その期待に応えることとなる。

実際の改修にあたっては、「レーモンドならどう考えるか」という内なる対話が延々と繰り返されていった。元良さんの師匠であるアンジェロ・マンジャロッティは、棟梁による日本の建築システムに共感し、素材の物性に逆らわないデザインで知られる。それは期せずしてレーモンドの考え方と一致し、ストレートに設計に取り組めたという。増築部を取り壊し、外壁のモルタルをすべてはがしてみると構造体があらわになる。幸いだったのは、1階床や軒先は傷みが激しいものの、柱・梁はしっかりしていたこと。「触った瞬間、大丈夫だよって木が言っている感じがした」と元良さん。ガラスの入った木製掃き出し窓など多くの材料に洗いをかけて再利用することで、オリジナルの記憶を呼び起こすとともに全体の質感を格段に高めている。

建物を維持するには構造と雨じまいが重要である。元の外壁内には縦横に井桁状に組んだ間柱があり、レーモンド独自の耐震性への配慮が見られた。今回は構造用合板を入れて耐震壁とし、防水層と空気層をもつ通気工法としている。外壁の新たなスギ下見板には、自然素材の保護塗料で開発されたばかりの透明なものを塗った。平葺きの屋根にも強力な防水下地を挟み込んでいる。目につかないところで最新の技術が使われた。

また現しの丸太の垂木は、そのまま外の軒に連続する意匠が美しい。しかしオリジナルの軒先は傷んで落ちていた。ここでは構造的な整合性よりインテリアの雰囲気を保つことを優先し、外部のみ新材の丸太を桁上で継ぎ、フラッシュ板状の野地板から吊り込んだ。屋根はオリジナルよりわずかに厚くな

玄関

扉を開けると庭が視界に飛び込んでくる。脇のベンチは原図を参考に復原されたもの。ポーチの丸柱と梁は、職人技の光付けによって接合。

出典：『アントニンレイモンド作品集 1920-1935』（城南書院）

竣工時（1934年）の姿

竣工以来の変遷

竣工時は、下見板張りにカラ松の枝葺きという姿。後にモルタルで覆われトタン屋根をのせる姿に変わっていたが、時を経て創造的に復原された。

西側外観

古写真などを頼りに、下見板張りの姿に復原された外観。外壁の木材には植物油系クリア塗装が施され、素木の風合いだが腐食していない。

ったが、先端の繊細なプロポーションは踏襲されている。1本ずつ断面の異なる丸太と外壁との納まりは難しく、この加工だけで2カ月を要したそうだ。

オリジナルを進化させる

「将来にわたる利用」に大きくかかわるのが水まわりである。浴室とトイレは最新の機器に替えるとともに、外壁のデザインも一新した。小さな窓の開いた壁から、全体を居間と同様な「芯外し」の掃き出し窓へ。「芯外し」とは壁の芯からサッシを外側に持ち出す、いわゆるカーテンウォールだ。レーモンドの「軽井沢式」は地元の材で地元の大工がつくる山小屋風のものを指すが、こうした手法が空間にモダンな雰囲気を漂わせている。

「おこがましいが、ここではそうした試みをさらに進化させたかった」と元良さん。それは創作的な復原行為なのだ。道路から遠く緑の奥にある開放的な浴室は、じつに気持ちがいい。

現在の環境に適合させる

ふたつ目の条件、敷地全体の環境を整備したことの意味は非常に大きい。オリジナルの竣工時とは土地の形状、周囲の建物などが変わっている。今の環境に最適なものをつくること。まず別邸東側のレベルが低く、道路からの浸水が建物を傷めていたため土留めをする。背中を向けていた主屋（設計者は不詳）との視線をつくるため、主屋の浴室を移動させ、そのダイニングを別邸側に開く。そして2棟間に繁っていた笹を先ほどの土留めに移し、そこを芝生敷きに。同様に樹木を南東側隣地の目隠しのために移植。その結果、主屋の南側の庭、主屋、2棟間の庭、別邸、別邸東側の土留めへと空間がつながり、すばらしい奥行きを生んでいる。逆に別邸からは、主屋の平屋の屋根越しに南側の森が望める。

周辺の道路幅がきわめて狭いため大木は運べず、基本的に敷地内部で木を

写真提供：元良信彦

改修前の姿

1階 ダイニング

1階のダイニングからテラス側を見る。窓まわりは柱の外に建具を納める「芯外し」。建具を開けると、独立柱のように柱が立っている。

2階

2階の子ども部屋から寝室（夫人用）を見る。家具は当時のままだが、ベッドの布地が張り替えられている。垂木や天井板は当初材。

移設することになる。これらの工事は年若い地元の植木職人が行った。和洋さまざまな樹種が入り混じった軽井沢の植生を知る彼らは、それを巧みに景色に溶け込ませた。「この環境全部で『OKA MASAKAZU HOUSE』です」という元良さんの言葉が印象に残る。

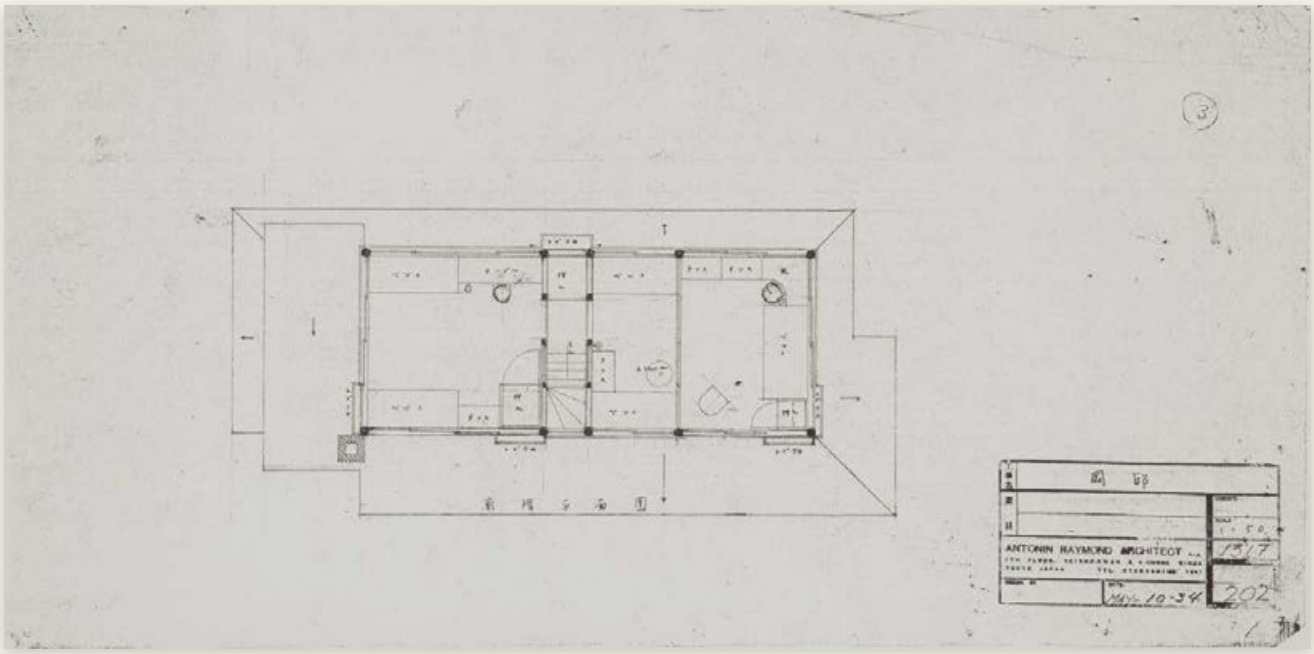
住み続けることへの強い意志

取材に訪れた4月は、これからさらに緑が濃くなる季節。それでもゆるやかな芝の斜面を上がった先にある別邸は、戦前に花開いた豊かな別荘文化を鮮烈にイメージさせる。海外在住の建主のご家族が初めてこの改修を目にしたときは、幼時にタイムスリップしたように茫然とされていたそうだ。

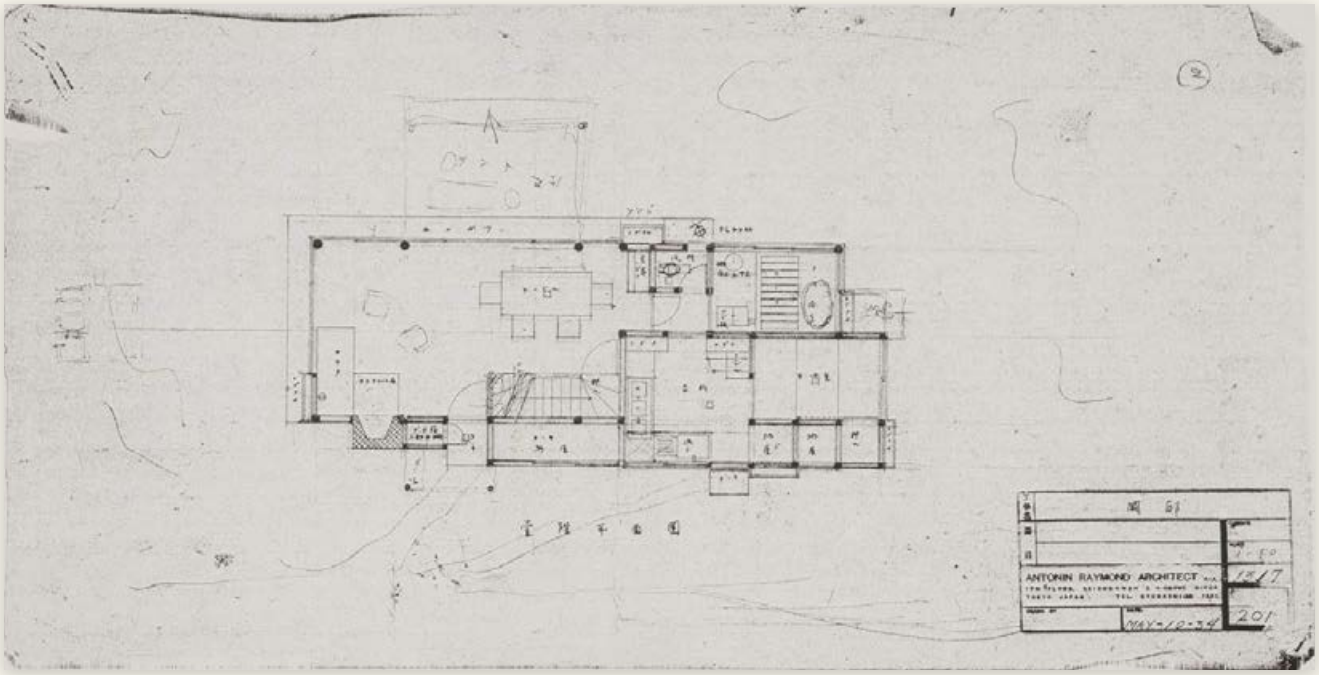
室内にはレーモンド夫人であるノエミ・レーモンドのデザインした椅子が集められ、おだやかな気配に満ちている。2階床を支える丸太の根太、木製掃き出し窓などの華奢な造りは驚くほどだ。オリジナルの3㎜厚のガラスは小さなお子さんが割ってしまったこともあるそうだが、それを通して揺らめく景色は味わい深い。「低気密・低断熱」と元良さんは笑うが、夏の別荘にまで高性能を求める現代住宅のほうに疑問を感じてくる。

最後にこの作品から学ぶべきは、よい家をとことん住みこなし、ずっとメンテナンスを続けようという建主の強靱な意志である。木製雨戸の開け閉てにはコツが必要だし手間もかかる。秋口の冷気には暖炉を焚く。美しい外壁は昨年塗り直されたという。庭の手入れも含め、この家の継続には覚悟が必要だ。その姿勢に心から敬意を表したい。

竣工時（1934年）の原図



2階平面図



1階平面図

0 1 2m 1/150 N

アントニン・レーモンド

Antonin Raymond

1888年オーストリア領ボヘミア地方（現・チェコ）生まれ。プラハの工芸美術大学に学び、米国に渡る。キャス・ギルバート、フランク・ロイド・ライトのもとで働く。1919年ライトとともに帝国ホテル建設のため来日。23年レーモンド建築事務所設立。76年逝去。おもな作品＝「軽井沢 夏の家（現・ペイネ美術館）」(33)、「リーダーズ・ダイジェスト東京支店」(51)、「聖アンセルモ教会」(54) など。

「芯外し」も読み取れる図面

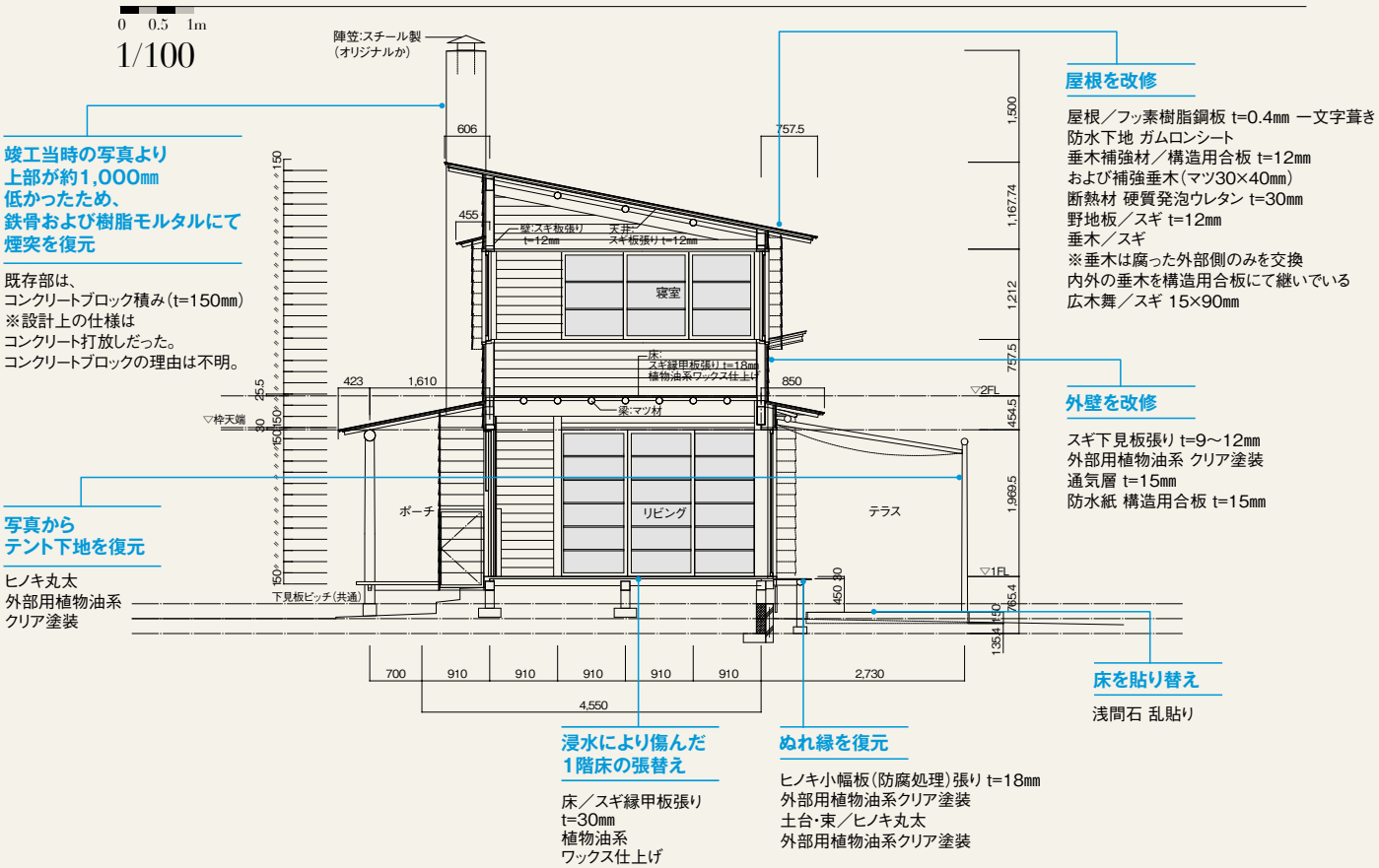
上２点はレーモンド設計事務所に保管されている「OKA MASA KAZU HOUSE」の原図。1934年５月10日の日付けがある。担当は、後にレーモンド建築設計事務所（現・レーモンド設計事務所）の代表取締役社長になる天野正治。

柱は、外まわりは円柱、内側は角柱である。また柱が黒く塗られているため、壁や建具との関係がわかりやすい。１階のリビング・ダイニングの建具は、柱よりも外側に設置された、いわゆる「芯外し」であることが見てとれる。玄関扉との納まりを気にしたのか、階段にスタディをした形跡がある。玄関脇には「ベンチ」と記されているが、改修前にはなかった。元良信彦さんによる改修の際に、原図の意図をくみとり、新たにベンチが設置された。

そのほか、造付け家具も描かれているが、現在も残っているものがほとんどである。テラスのところには「テント」とともに、傾斜方向まで加筆されている。

元良信彦さんによる2009年の改修

断面図

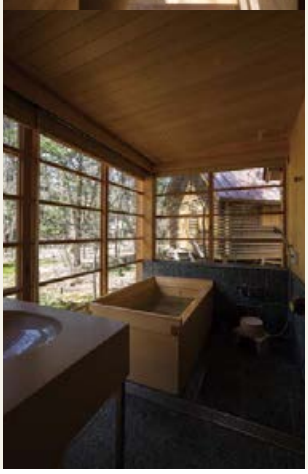


←トイレ

オリジナルの設計では、窓まわりが「芯外し」になっているのはリビング・ダイニングだけだったが、元良さんにより、トイレや浴室も「芯外し」の掃き出し窓に改修された。

主屋の浴室 →

「OKA MASAKAZU HOUSE」は敷地内の別邸であり、向かいに主屋がある。主屋の浴室から別邸を見る。



← 別邸の浴室

浴槽はヒバ造に更新された。御所でも使われる、無垢の木材の継手仕口と特殊フィルムでつくられたもの。主屋にも同じ浴槽がある。

「OKA MASAKAZU HOUSE」

建築概要	
所在地	長野県北佐久郡軽井沢町
主要用途	週末住宅
家族構成	6人
原設計	アントニン・レーモンド
改修設計	元良信彦／
	モトラデザインスタジオ
	一級建築士事務所
構造設計	構造計画プラス・ワン
構造	木造在来工法
施工	三富工務店
階数	地上2階
敷地面積	3,397.77㎡
建築面積	175.73㎡（主屋・別邸合計）
延床面積	216.02㎡（主屋・別邸合計）
設計期間	2008年6月〜2009年4月
工事期間	2008年11月〜2009年6月

おもな外部仕上げ	
屋根	フッ素樹脂鋼板 t=0.4㎜
	一文字葺き
外壁	スギ下見板張り t=9〜12㎜
	外部用植物油系クリア塗装
開口部	引き違い窓、片開き窓、雨戸
	（すべてスギ材）
植栽	モミ、モミジ、カリン、
	ツツジ、グミ、シダ、芝、苔ほか
テラス	浅間石 乱貼り

おもな内部仕上げ	
台所・トイレ・洗面所・リビング・ダイニング	
床	スギ縁甲板 t=30㎜
	植物油系ワックス仕上げ
壁・天井	スギ板張り t=12㎜

浴室	
床	御影石 バーナー仕上げ
壁	米ヒバ t=12㎜、御影石
	バーナー仕上げ（腰壁）
天井	米ヒバ t=12㎜

寝室・洋室	
床	スギ縁甲板 t=18㎜
	植物油系ワックス仕上げ
壁・天井	スギ板張り t=12㎜

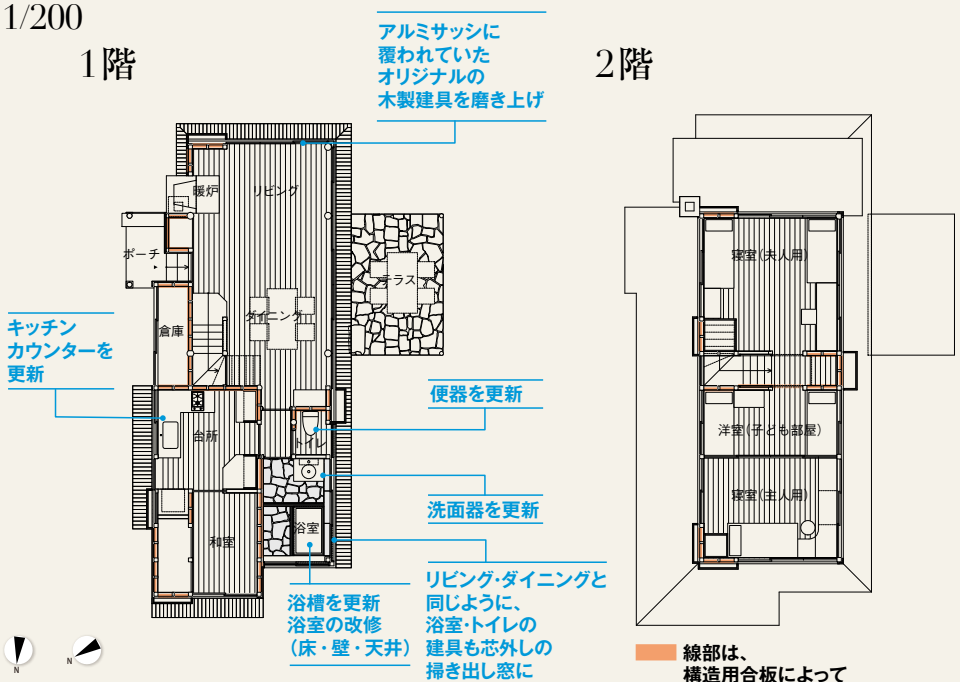
Motora Nobuhiko

元良信彦

もとら・のぶひこ／1956年東京都生まれ。81年日本大学理工学部建築学科卒業。同年鹿島建設建築設計本部。86年香山アトリエ環境造形研究所。87年Studio Angelo Mangiarotti（ミラノ）。89年前田・元良都市建築設計事務所。92年モトラデザインスタジオ一級建築士事務所。おもな作品＝「清水庵」（96、小川広次と共同設計）、「オリエント・カフェ」（2011）。

平面図

0 1 2m
1/200

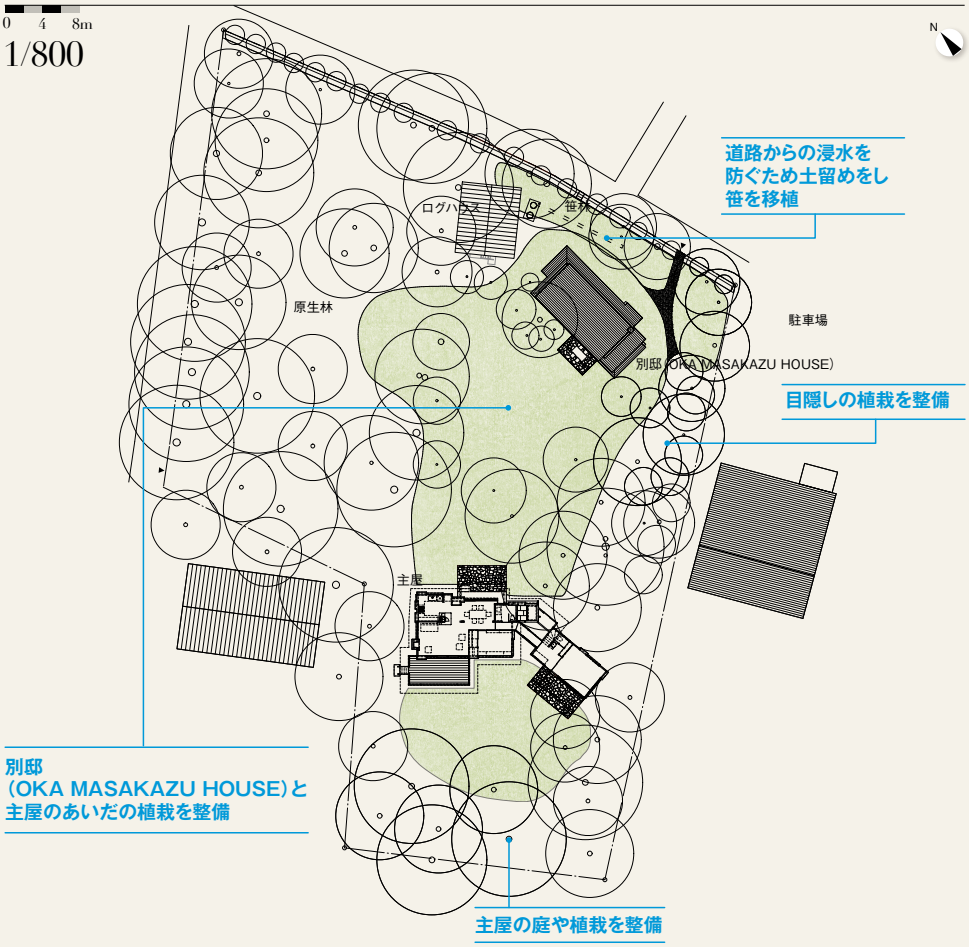


現在の方位

作品集『アントニンレイモンド作品集 1920-1935』での方位
※1936年に出版された
作品集『アントニンレイモンド作品集1920-1935』（城南書院）
では主要室が南向きなのに対して、
実際はほぼ西を向いて立っている。
理由は不明。

配置図

0 4 8m
1/800



外観

前面道路側（東）の外観。地域の交流も盛んな閑静な住宅街に立っている。羽目板を張り直した既存主屋の南庭のあった場所に、コンクリート壁の離れが増築された。

感泣亭

原設計　生田 勉

改修設計　Eureka（エウレカ）＋三浦清史

Special Feature
The Future of Vintage Residences

Part 5

Case Study "Kankyutei"

引き継ぐための増築

1964年頃に生田勉によってつくられた住宅。
生田は後の増築を想定して、敷地に余白をもたせて設計していた。
50年近くたって、その余白に、
若手建築家組織のEurekaと三浦清史さんが、
コミュニティ・スペースを増築した。

取材・文／大井隆弘　写真／浅田美浩

「亭」を問いなおす

折れ曲がって続く木の壁。ガラス戸で囲われた開放的な空間。煉瓦敷きの床には、たくさんの椅子とテーブルが置かれ、表札には「感泣亭（かんきゅうてい）」の文字。料理屋だろうか。いや、そうではない。これは、かつて詩人・小山正孝（以下、小山）が暮らした家。以前は主屋だけ立っていたが、最近になって小山の息子夫婦が越してきて、古くなった主屋を改修し、その脇にモダンな建物を増築した。

「感泣亭」という名は、小山自身がつけたそうだ。小山は「感泣」という言葉を好み、自らの詩集のタイトルにも用いた。後ろにつく「亭」という言葉は、『広辞苑』を見ると、「住居」、「文人・芸人の号」のほかに、「料理屋の屋号につける語」として説明されている。すると、料理屋と感じさせた近年の増築は、「感泣亭」の意味を広げたようだが、増築の詳細を知るうちに、それはむしろ積極的な「亭」の問いなおしであった、と思うようになった。

70年ごし偶然のつながり

東急東横線の元住吉駅から歩くこと7分。ここは、かつて神奈川県が同潤会に建設・管理を委託し、住宅営団が引き継いだ「元住吉住宅」があった場所だ。まわりを水田に囲まれて、166戸の平屋建てが行儀よく並んでいた。今ではそのほとんどが2階建てに替わったが、「感泣亭」はちょうどその中間ほどの高さ。2階建てながら、屋根をぐっと低く抑え、こぢんまりとしたたたずまいを見せている。

「感泣亭」が建設されたのは、東京オリンピックが開催された1964年頃。「栗の木のある家」(56)で有名な建築家・生田勉（以下、生田）が設計を手がけた。小山と生田は、41年に『立原道造全集』(山本書店）の編集を一緒に手がけたことがきっかけで知りあい、以来友人の関係を築いた。20年を越える親交の末の設計依頼であった。

一方、2012年に主屋の改修と増築を手がけたのは、Eureka（以下、エウレカ）と三浦清史さん。エウレカというのは、意匠設計の稲垣淳哉さんと佐野哲史さんが主宰するアトリエ事務所で、構造設計の永井拓生さん、環境設備設計の堀英祐さんとパートナーシップを結ぶ、小さな組織設計体。全員、早稲田大学出身だ。一方、三浦さんも同じ大学出身の建築家だが、エウレカの4人とは父と子くらい年齢に差がある。エウレカにとって心強い存在である。

エウレカと三浦さんが、どのように小山の息子夫婦と出会ったのかというと、じつはこちらも立原がらみ。少し詳しく説明すると、立原が生前に設計した未完の週末住宅「ヒアシンスハウス」を、埼玉県の別所沼公園に建設しようという計画があり、その委員に佐野さんと三浦さんが加わっていた。この計画は04年に実現をみたが、その後、同じ建設委員の仲間の紹介により、「感泣亭」の増築を検討していた小山の息子夫婦と知り合いになり、佐野さんと三浦さんがこれを手がけることになったそうだ。小山と生田の出会いから70年後、偶然にも、再び立原に関係して、施主と設計者につながりが生まれた。

将来を見すえた設計

エウレカと三浦さんは設計にあたり、小山の妻・常子さん、つまり現在の住まい手の母に聞き取り調査を行い、当時の設計の要点や生田のこだわりについて記録を残している。それによると、まず設計の要点は、工事費をかけすぎず、平屋ばかりの周辺環境に配慮して、面積を最小限とすること。これは、将来の増築も見込んだものだという。屋根の形は生田のこだわりだったようで、書斎の上は2階をつくらずに、方形屋根をそのままの勾配で葺き下ろしている。なるほど、道路側の立面はずいぶん低い。室内は基本的に合板張りだが、これは後で好きな仕上げに、と生田から説明を受けたそうだ。周辺環境に気を配りつつ、将来を見すえた設計態度がうかがわれる。コンクリートブロックを積み、木造と切り離して水まわり

増築部のアプローチ

増築部のトイレ

主屋の書斎より

写真上／主屋と離れの隙間が、離れやテラスへのアプローチになっている。中／トイレはコンクリートブロック造。下／窓の奥に離れ。

をつくっているのも、いつか設備を新しくしたとき、形や大きさの変更がしやすいように、との配慮であろう。それを示すように、1975年から76年にかけて三畳の和室は八畳に、80年には書斎と玄関が増築された。今回増築ができたのも、こうした生田の配慮と無縁ではないだろう。

ネットワークも受け継ぐ

この増築計画が始まった当時、常子さんは91歳。小山が亡くなった2002年以降、「感泣亭」には常子さんがひとりで暮らしていた。東京に住んでいた息子夫婦が心配をし、引っ越しを決意したのが、「感泣亭」の改修と増築のそもそもの始まりである。このとき、主屋は築50年を越えていたが、「これだけいい家はないし、父の遺品とセットで残したい」という強い想いが、息子さんにはあった。

最初、増築部は小山を偲んで定期的に開かれる集まりに使用されることが想定されていたが、それだけではなく別の考えもあったという。息子さんにとって、「感泣亭」は実家とはいえ、長らく離れていたので、元住吉は決して慣れた土地ではなかった。そこで、増築部には、地域に溶け込むための場、としての役割を期待することにした。母の常子さんはこの地で長年にわたって英語教室を開いていたので、地域では顔の知れた存在。その母の人脈によって、地域のための活動をする。家だけではなく、ネットワークも受け継ぐ。これは、従来の「感泣亭」に、公共性を加える考えである。

離れ

離れは、南側のコンクリート壁のほかはガラス戸で囲まれており、大きく開放することもできる。床の煉瓦敷きは既存部に合わせた仕様。

新たな「感泣亭」としてまとめる

こうした想いや考えを受けて、エウレカと三浦さんは動きはじめた。まず行ったのは主屋の構造補強。これは、住居としての今後に配慮した対応である。しかし、生田という著名建築家の作品であること、小山という詩人の書斎が存在することを考えると、とくに内部はそのまま残したい。なんとか外部だけで補強ができないか。そうして構造計算による検討を進めた結果、基礎の一部に手を加えれば、外壁と屋根の補強のみで、構造耐力上の安全性が確認できることがわかった。ただし、1980年にも玄関と書斎の増築が行われており、そのときに既存の外壁を撤去し、代わりに下屋が取り付けられたため、とくに壁量が不足していた。そこで、下屋の壁を上へ延ばし、屋根と連結して補強が行われた。したがって、手前の屋根は新しく、竣工当初の

テラスと離れ

離れは、さまざまな位置にガラス戸を挿入することで、内外の範囲を調整することができる。手前テラスと奥の離れを一体的に使うこともできる。

姿より葺き下っている。「こぢんまりとしたたたずまい」は、この工事で強調され、単純化された立面もあわせて、より当初の印象に近づいたようである。小山を偲んで訪れる人々に対する、設計者の配慮がうかがわれよう。

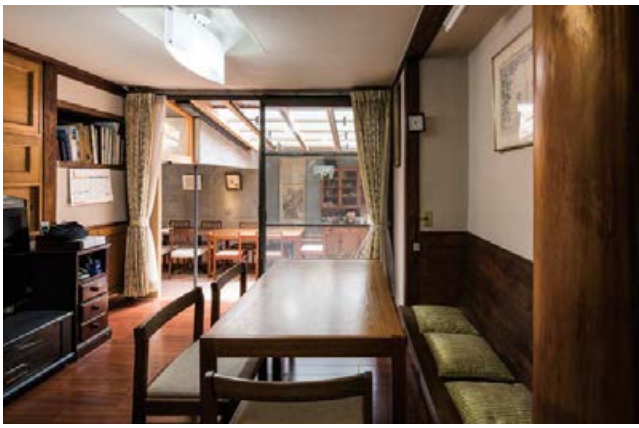
そして、いよいよ増築である。増築も、主屋のたたずまいを残すことを重視して、分離増築が選ばれた。まず隣地との境に、主屋側だけオープンにする格好で、RC造の壁、袖壁、屋根をつくり、やや低い位置から木造の屋根を延ばして、細い鉄柱で支えている。木造屋根には、端部に鉄材、その下にモルタル塗の垂壁がまわる。三方はガラス戸で囲まれ、非常に開放的である。食事会などの内部で行われている活動が見えることは、地域のネットワークの継承という考えを実現するうえでとくに重要であったと思われる。

そのうえで、このガラス戸は、主屋の竪羽目板と同じ材料としている。また、増築部の床材も、既存の玄関ポーチや塀に続いて煉瓦で揃え、トイレの囲いも主屋の水まわり同様ブロック積みとしている。こうした主屋の要素を引き継ぐ工夫によって、全体が新たな「感泣亭」としてまとめられた。

さて、この増築が完成したのは2012年。竣工後、地域の集まりを催した際は、母の常子さんが大勢の人を集めてくれたそうだ。そして、「感泣亭」が今後も生きつづけることを確認して、常子さんは昨年亡くなられた。享年93。常子さんの遺志で、葬儀は増築部で執り行われた。その後、この空間は継続的に使用され、周囲からの評判も上々。レンタル希望まで増えている。

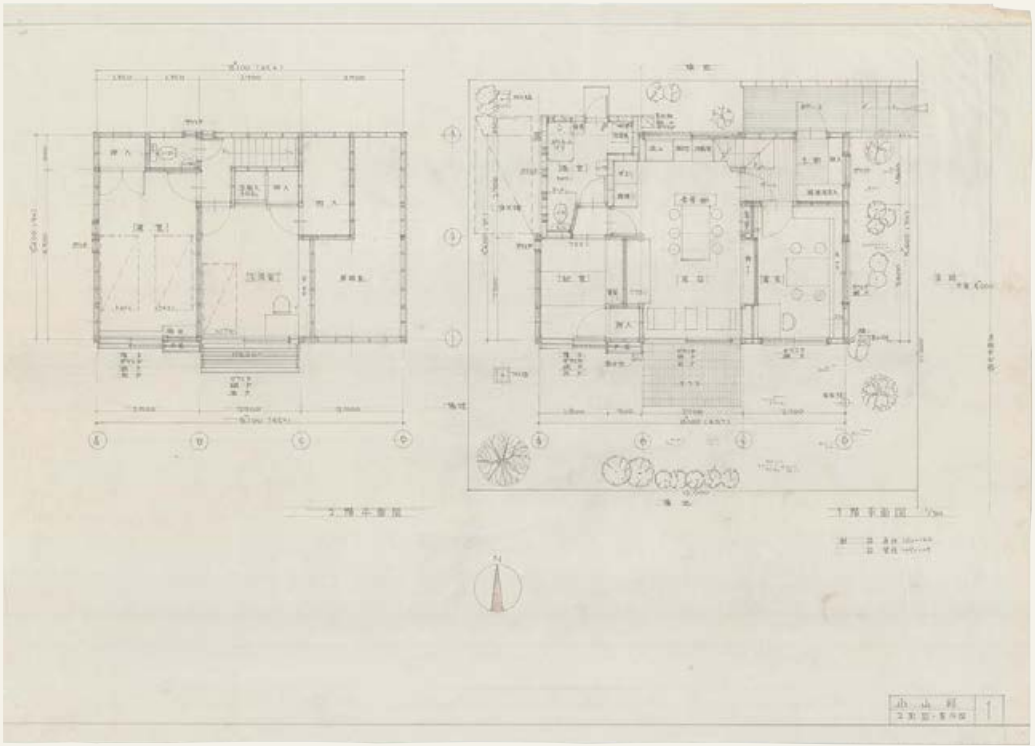
生田の将来を見すえた設計、立原に関係したつながりが、エウレカと三浦さんをこの地に引きあわせた。そして、息子夫婦の「ネットワークも受け継ぐ」という考えと、それに基づく設計は、「亭」の内にある公共性を引き出し、詩人の号やその住居としてあった「感泣亭」の存在を、地域に向かって開いてみせた。水田、同潤会、住宅営団ときて生田勉。「感泣亭」は、土地や住宅がもつ歴史を次世代へ継承する際の、増築がもたらす意味の変化をはっきり示す好個の作品といえよう。

既存部の居間

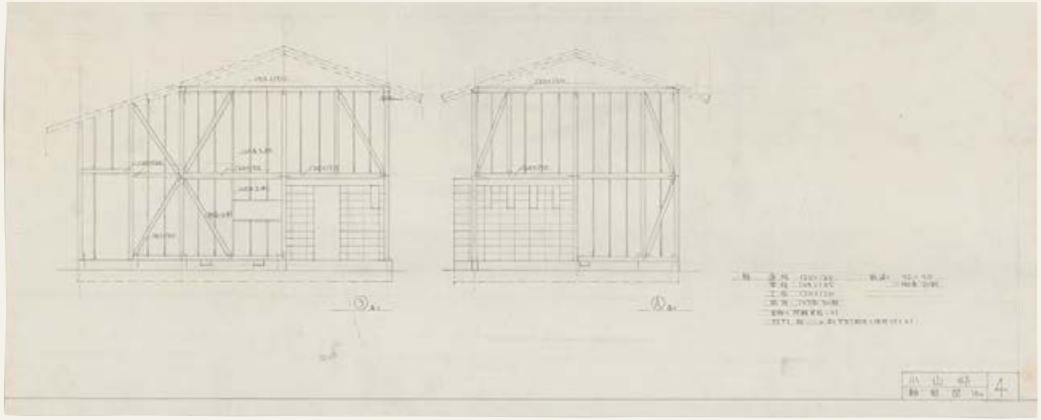


大黒柱のような磨き丸太や、そこに取り付けられた腰かけがあり、家の中心になっている。居間と奥の増築部の離れやテラスがつながっている。

竣工時（1964年頃）の原図



平面図　0 1 2m　1/200　N



軸組図　0 1 2m　1/200

Ikuta Tsutomu

生田 勉

いくた・つとむ／1912年北海道生まれ。39年東京帝国大学（現・東京大学）工学部建築科卒業後、逓信省営繕課航空局。44年第一高等学校教授。50年東京大学教養学部助教授、後に教授、名誉教授。67年槐建築研究所開設、後に生田勉都市建築研究所に改称。80年逝去。おもな作品＝「栗の木のある家」(56)、「牟礼の家」(61)、「五千尺ロッジ」(64) など。

増築を想定した当時の平面

左２点は「小山邸」とあるが、「感泣亭」の竣工時の図面。生田勉の図面は、もともとは生田家が保管していたが、現在は金沢工業大学建築アーカイヴス研究所に所蔵されている。

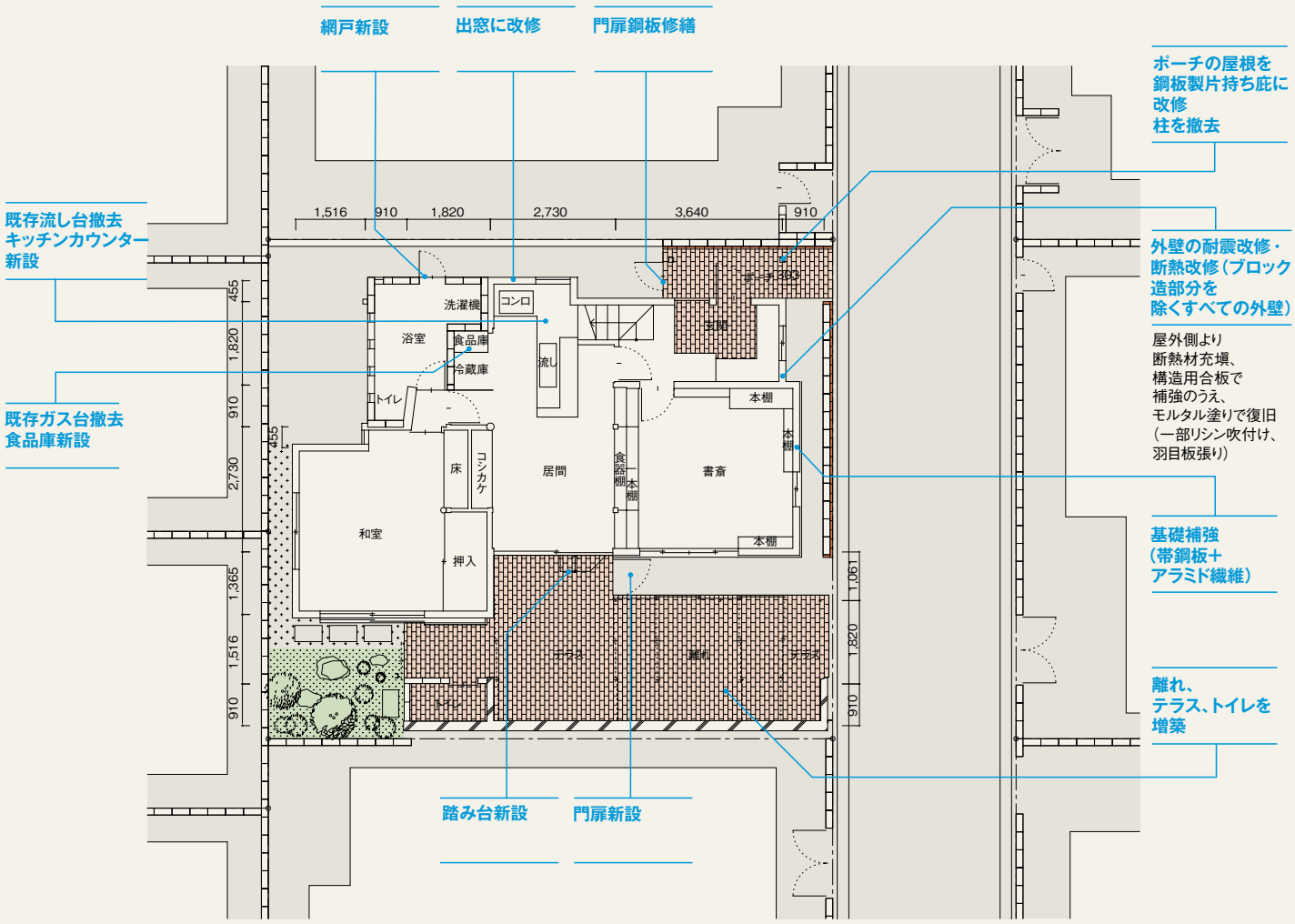
生田は、友人や親戚の設計を手がけてきたため、豪邸というよりは予算に制限のある住宅作品が多い。そうした住宅に対し、生田は後の増築を想定したプランニングをしている。たとえば、敷地の周囲に余白をつくることにより、周囲への増築を可能にしている。そのプランニングを、生田の自邸「牟礼の家」でも、この「感泣亭」でも実施している。

原図を見ると、まず南側に大きな庭が確保されているほか、東側や西側にも若干の余白がある。この東西の余白には、Eurekaと三浦清史さんが携わる以前から、すでに増築がなされており、書斎や和室が拡張されていた。Eurekaと三浦さんは、南側の増築を担ったのである。「牟礼の家」でも増築が進んでおり、生田の想定どおりになっている。

また浴室まわりの壁はコンクリートブロックである。これは水まわりの防水性や、台所の防火性への配慮だと思われるが、増築時や設備更新のときに、再構成しやすい材料選び。

1階平面図

0 1 2m
1/150



写真右／「TOYO TOKI」と記された古い便器が残っている。コンクリートブロック造の空間。左／屋根成りの天井に天窓。２階は改修されていないが、切り詰められた合理的な空間である。

2階 書斎

1階 浴室とトイレ

「感泣亭」

建築概要	
所在地	神奈川県川崎市中原区
主要用途	住宅+離れ
家族構成	夫婦
設計	Eureka+三浦清史／こうだ建築設計事務所
構造設計	設計工房佐久間（既存部）、永井拓生（増築部）
構造	木造（既存部）、混構造（増築部／コンクリート造、木造、鉄骨造、補強コンクリートブロック造）
施工	下タ村工務店（既存部）、広・佐藤工務店（増築部）
階数	地上2階
敷地面積	134.10㎡
建築面積	79.09㎡
延床面積	116.19㎡
設計期間	2010年9月～2011年11月
工事期間	2011年7月～2012年4月
おもな外部仕上げ	
屋根	ガルバリウム鋼板
外壁	防水モルタル、リシン吹付け、コンクリート打放し、ラワン羽目板張り
開口部	木製框戸、アルミサッシ
外構	煉瓦
おもな内部仕上げ	
既存部	
床	フローリング
壁	ラワン合板
天井	三井ボード
増築部	
床	煉瓦
壁	コンクリート打放し
天井	ラワン合板

写真提供：Eureka

Eureka
エウレカ

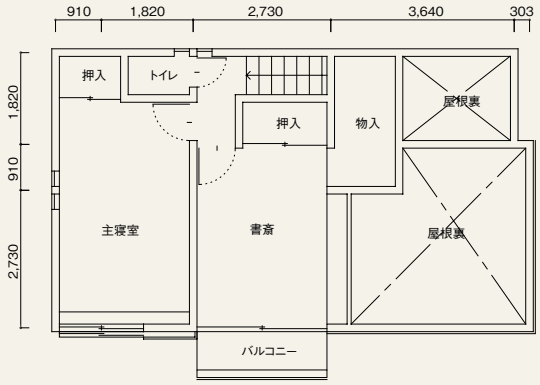
佐野哲史（さの・さとし、左）、稲垣淳哉（いながき・じゅんや、中左）、永井拓生（ながい・たくお、中右）、堀英祐（ほり・えいすけ、右）の４名による建築設計事務所。いずれも1980年生まれ、早稲田大学出身。稲垣・佐野が建築計画、永井が構造計画、堀が環境設備計画を担当。おもな作品＝「Blanks」(2010)、「Dragon Court Village」(13)。

三浦清史
Miura Kiyofumi

みうら・きよふみ／1948年千葉県生まれ。72年早稲田大学理工学部建築学科卒業後、大成プレハブ。86年こうだ建築設計事務所。おもな作品＝「大阪ガス実験集合住宅 NEXT21（603住戸）」(93)、「顯本寺本堂」(2003、ともに内田祥哉との共同設計)。

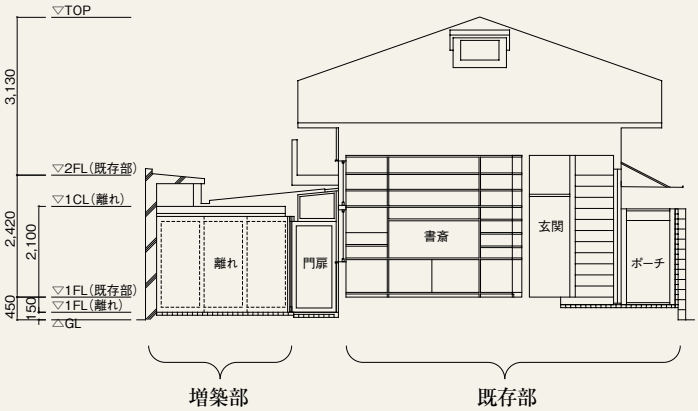
2階平面図

0 1 2m
1/150



断面図

0 1 2m
1/150



変幻自在、伝統的日本の「座敷」

「旅のバスルーム」というからには、日本の旅館を忘れてはいけない。ホテルでも旅館でも国内の宿泊施設のことを書くと、いろいろ「さしさわり」があって避けていたのだが……。すばらしい旅館は上質なホテルよりもホスピタリティが高いといわれることもあるが、なかなか同列には論じられない。

バスルームからいうと、旅館の浴室は共同が主。そして食事は最近少なくなったが「部屋食」。食事時間はあらかじめ定められ、内容もアラカルトではない。また引き戸が多いから遮音はホテルのようにはいかず、床は畳が主体だから立ち居振る舞いは座様式で寝所や食事処にもなって変幻自在。そして一対一以上の対人サービスだから「心づけ」などにも気を使うことになる。だから「ぼくは嫌いだね」という向きもある。その典型的な旅館に泊まってみよう。

城崎は兵庫県の美しい温泉町。街のなかを流れる大谿（おおたに）川に柳がそよぐ。ここでイモリに石を当ててしまったのか（＊1）などと浅い清流を眺める。その川沿いに旅館や土産物店などが楚々と並んでいる。この「楚々と」が大事で、にぎやかになってしまった温泉街にはもうそれを望むべくもない。この宿はその川からちょっと離れ、街の中心部を過ぎたあたりにある。

きちんとした純日本的な旅館で江戸安政年間に創業されたという。門や玄関のたたずまい、帳場、ロビーから見える庭園など、初めて見るのになぜかなつかしさを覚える。

「本館」には、あの平田雅哉（＊2）の手になる「平田館」があり、近代数寄屋造のすばらしい遺構が残されているのだが、今回の対象ではない。

案内された部屋は京間（＊3）の8畳。内法高（＊4）1780㎜、天井高2310㎜。床の間に書院が付く。面皮の柱（＊5）。天井の杉は中杢（＊6）がせまくて美しい。床は高いレベルにあって、庭を俯瞰する視点。軒は深い。浴室が付いているが、共同の浴室に向かう。この街は「外湯めぐり」でも有名で、いくつもの共同浴場を浴衣姿で「はしご」することができる。

入浴を終えて「いい湯だった」と帰ってくると、部屋食の用意ができている。その日は松葉ガニを中心にした食事を楽しみ、食後、ラウンジでコーヒーをいただいている短い時間に部屋に布団が敷かれた。

仲居さんは「外は少し寒くなりましたね」などと笑顔で応対したり、ご飯が少なくなった頃にすっと現れて、「おかわりいかがですか」などと言ったりする。当然のようだがこの驚くべき心遣いはどうしてできるのだろう。

これは「気配」とか、かすかな「音」がきっかけなのではないか、と思う。そして彼女たちはきっと「間」を感じているのだ。見えなくても私たちの行動がわかるのだ。

私はホテル泊が多いのだが、時々旅館に身を任せてみたくなる。ヒューマンスケールを再確認したいためと、人的なサービスが最上なのかもしれないと思えるからか。

明日は雪もやんでいるだろう。少し歩いて麦わら細工（＊7）の店でものぞいてみよう。

床の間と書院を見る。

＊1／文豪といわれる志賀直哉（1883～1971）の代表作のひとつに小説『城の崎にて』があり、主人公の気まぐれで投げた小石がイモリに当たってしまう件がある。

＊2／平田雅哉（1900～80）：藤原新三郎棟梁に師事、30歳で独立。朝香宮の茶室など数多くの茶室、住宅を手がけ、また吉兆など数寄屋造の料亭、旅館などに手腕を発揮した。73年瑞宝章受章。西村屋の「平田館」は60年の作。

＊3／京間：京都・西日本で多く用いられた寸法体系。畳寸法3尺1寸5分（955㎜）×6尺3寸（1910㎜）。

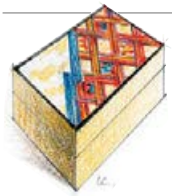
＊4／内法高：鴨居と敷居のあいだの距離。

＊5／面皮の柱：角を丸面のまま残した柱、数寄屋造では「行」の相といわれる。

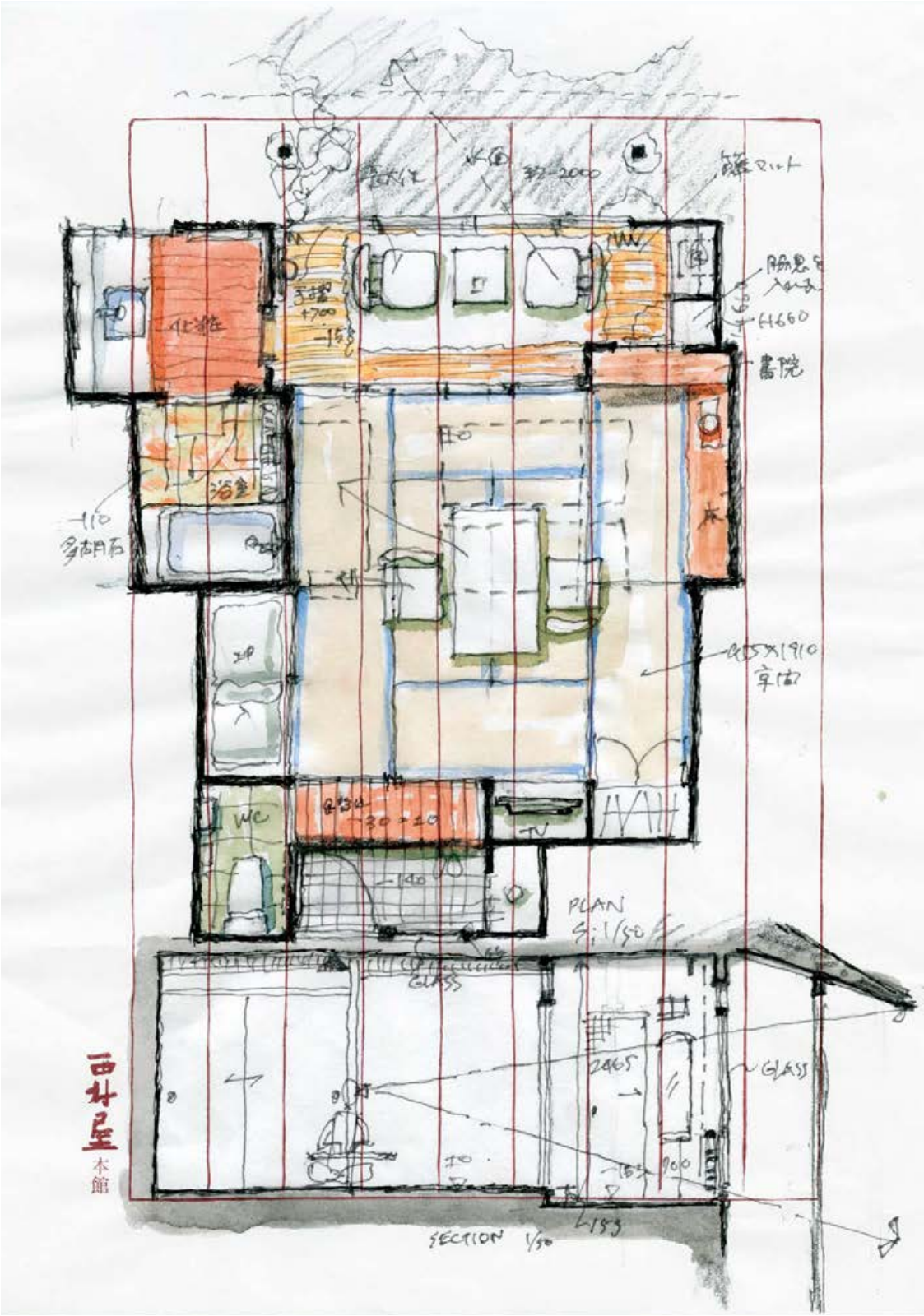
＊6／中杢：木目で中央に板目、周囲が柾目の良材。

＊7／麦わら細工：280年ほど前から伝わる城崎の伝統工芸。開いた色麦わらを切り、箱などに精緻に貼っていく。

うら・かずや／建築家・インテリアデザイナー。1947年北海道生まれ。70年東京藝術大学美術学部工芸科卒業。72年同大学大学院修士課程修了。同年日建設計入社。99～2012年日建スペースデザイン代表取締役。現在、浦一也デザイン研究室主宰。北海道日建設計デザインアドバイザー。著書に『旅はゲストルーム』（東京書籍・光文社）、『測って描く旅』（彰国社）、『旅はゲストルームⅡ』（光文社）がある。



麦わら細工。



8畳にフローリング付き、
浴室付きの平面。
やはり京間はゆったり。

Text & Sketch by Ura Kazuya

西村屋本館	Add／〒669-6101兵庫県豊岡市城崎町湯島469
	Tel／0796-32-2211
	URL／www.nishimuraya.ne.jp/honkan/
	Charges／32,550円～72,510円（2名1室1泊2食付きのお一人さま料金）

自閉の中の開放

Matsukawa Box

1

まつかわ・ぼっくす　設計／宮脇 檀

Miyawaki Mayumi × Fujimori Terunobu

1／2階のロフトから吹抜けを見る。

現代住宅併走

連載 第三十回

文／藤森照信
Text by Fujimori Terunobu
Photographs by Akiyama Ryoji

写真／秋山亮二
（宮脇檀のポートレイトを除く）

戦後の住宅作家として一時代を築いた宮脇檀は〝ボックス・シリーズ〟で知られ、この連載でも15年前、「かんの・ぼっくす」を紹介した(『TOTO通信』2000年Vol.3)が、箱の代表といえばやはり〈まつかわ・ぼっくす〉といっていい。しかし、15年前には取材が難しかった。

少し前、現代美術キュレーターの清水敏男さんと仕事したとき、オフィスは〈まつかわ・ぼっくす〉に置かれていると聞いて、これ幸いとこのたび訪れた。

まず外観を眺め、〝ぼっくす〟の名のとおり箱の中に閉じこもる造りであることを確認し、次に1971年という竣工年のことを考えた。この連載で何度も述べてきたように、日本の戦後モダニズム住宅は、ひとつの時期を境に大きく変わる。まず戦後の建築と住宅は社会と外に向かって開くことを旨とし、ピロティや大きな引き戸による開放性を建築的テーマとして清家清の一連の住宅や丹下健三邸(53)などがつくられた。

ところが、磯崎新「中山邸」(64)、原広司「伊藤邸」(67)を口火とし、私と同世代の坂本一成「散田の家」(69)が続き、そしてついに安藤忠雄「住吉の長屋」(76)と伊東豊雄「中野本町の家」(76)の出現によって、自閉的、あるいは内向的住宅が頂点に達する。

背後には、開かれた戦後の市民社会への表現者としての退屈感と、東京オリンピック以後に表立つ高度消費社会への違和感があったが、とにかく、64年から76年までのおよそ10年間に、モダニズムアヴァンギャルドたちは時代と社会の趨勢から切れた。建築の内側に逃げ込んだのである。この時期に切れたか切れなかったかがその後の立場を大きく左右し、切れた一部の者のみが今も表現者としては生き残っている。

というような観察を建築史家としてしてきたのだが、宮脇檀については〝切れたか切れなかったか〟の識別対象にはしてこなかった。

このたび初めて対象にしてみると、〈まつかわ・ぼっくす〉は間違いなく自閉し内向している。71年竣工ということは、自閉の季節のまっただなかで自閉した。開口部が裾壁を突き出した〝穴〟によってつくられ、中庭への唯一の開口部も軒はギリギリ低く抑えられ、2階の寝室に至っては視線より低い小窓が開くのみ。

にもかかわらずこの家に始まる宮脇のボックス・シリーズの内向性に私が気づかなかったのは、実物を知らなかったことに加え、図面と写真ではその点が抑えられていたからだ。どこからも外の見えない「中山邸」「伊藤邸」「住吉の長屋」「中野本町の家」の4作のような、住み心地を無視した前衛的試みを宮脇はしていない。

私を含め安藤、伊東など野武士世代が一世代上の宮脇を低めに見たのは、住み心地や機能性を無視するほどの前衛性、別の言葉でいえば〝主張の純度〟を欠いていたからだった。

実際、このたび初めて主室の椅子に座って中と外を眺めると、完全自閉4作とは目と身体の受ける印象がまるで違い、自閉性はさして感ぜず、自閉というよりは壁に包まれた安心感、そして心地よさがある。

だからこそ、この家の2階で育った施主の娘にして現オーナーは、この家の賃貸広告に宮脇檀の名作であることを明記し、改装しないことを条件に借り手を探し、たまたまその不動産広告を見た清水さんが借り手となったのだった。

内向性の造りにもかかわらず自閉感を生まなかった秘訣はどこにあるんだろうか。

完全自閉4作との違いを探せば、まず、中庭への視線の抜けがいい。低い軒によって少し加圧されてスルッと外に向かった先には印象深くつくられた広めの中庭が広がる。「中野本町の家」にも中庭らしきものはあるが、ただのあかり採りにすぎない。

主室の吹抜けの上から差し込むトップライトもいい。「伊藤邸」の天井にあいた穴のごときトップライトと違い、壁から壁まで連続の横長のトップライト。ル・コルビュジエが主張した「横長連続窓」を天井化したと思ったらいい。

中庭と空に向かって口をあける〝穴〟以上に住まいとしての心地よさを演出してくれているのは、主室の吹抜け空間と木造建て込みのふたつ。

主室を吹抜けとし2階をロフトとする空間構成は、宮脇の工夫ではなくモダニズム系小住宅の定石

2

3

2／主室から障子越しの庭。3／伝統系木造による建て込み。

4

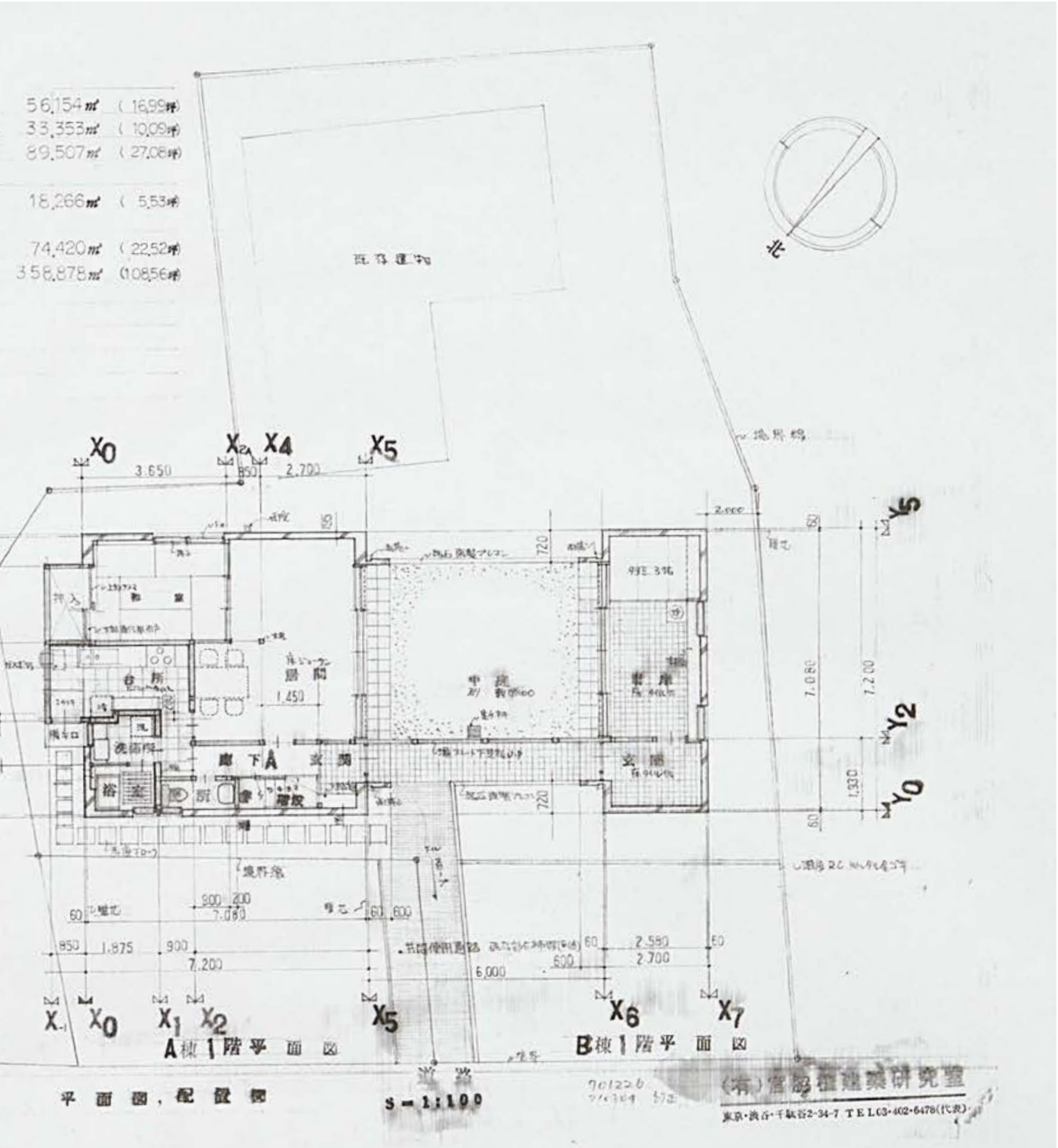
5

4／コンクリートの箱に天井から光が差し込み、木造の建て込みを浮かび上がらせる。

5／玄関まわりは宮脇の手で改造されている。
6／穴状の玄関から入る。

6

平面図



のひとつとして広く知られ、ル・コルビュジエの「シトロアン住宅」(1920)、住宅作家として戦後の一時期をリードした大熊喜英の諸作や増沢洵の「最小限住宅」(52)などが浮かんでくる。

もしこの吹抜け空間をつくる壁や2階の床が外壁と同じように鉄筋コンクリート造だったら、心地よさはずいぶん減ったにちがいない。コンクリートはどうしても厚く重い印象を禁じえないが、木造でつくると軽くシャープになるばかりか、材感はずっと目にも身体にもやさしくやわらかい。

完全自閉4作は、「中山邸」「住吉の長屋」「中野本町の家」の3つはすべて鉄筋コンクリート造だし、木造の「伊藤邸」も壁構造だから柱と梁の組み合わせや芯壁が露わになっているわけではなく、おそらく予算さえ許せば鉄筋コンクリートでつくられたにちがいない。

コンクリートの壁でつくられた箱の中に木造、それも伝統系木造を建て込んだところにこそ宮脇の独創があった。住宅を超えて、日本のモダニズム建築の流れのなかでの独創があった。

完全自閉4作とは、障子、襖、畳を使ったことも大きく違った。

この住まいの勘所となる伝統系木造の建て込みと、障子、襖、畳の使用を見て、吉村順三の作風を想った。障子、襖、畳、については戦後すぐの〝ジャポニズム〟も

Matsukawa Box

まつかわ・ぼっくす
（第1期）

建築概要	
所在地	東京都新宿区
主要用途	専用住宅
設計	宮脇 檀／宮脇檀建築研究室
施工	棒建設
敷地面積	358.88㎡
建築面積	75.42㎡
延床面積	107.77㎡
階数	地上2階
構造	鉄筋コンクリート造＋木造
竣工	1971年
図面提供／宮脇檀建築研究室	

宮脇 檀
Miyawaki Mayumi

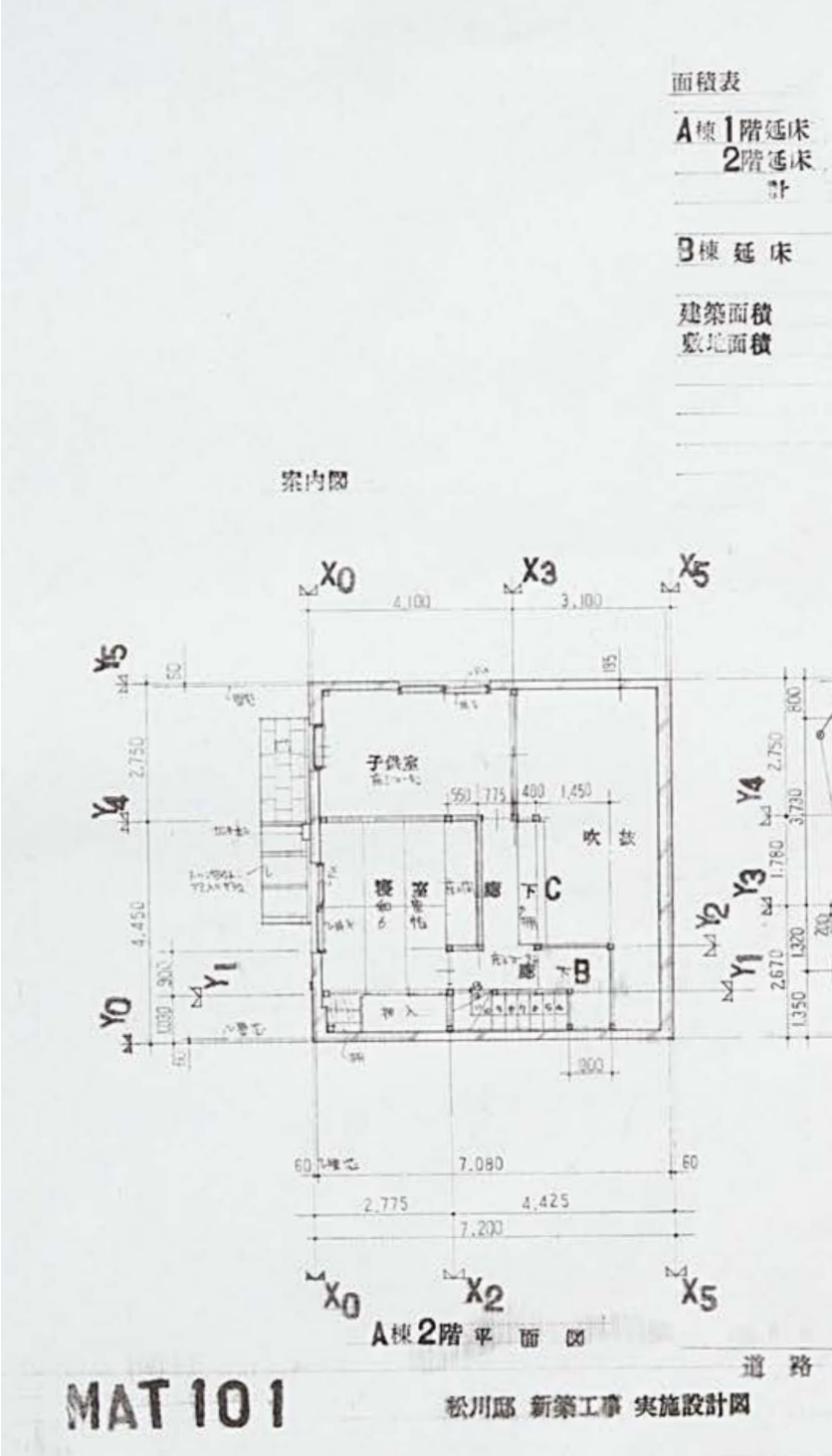
1936年愛知県生まれ。59年東京藝術大学美術学部建築科卒業、61年東京大学大学院工学研究科建築学科都市計画専攻修士課程修了。住宅作家という呼び名はこの人のためにあったような感じが、60年代からしばらく建築界と一般ジャーナリズムに漂っていた。宮脇の作品はいつも住宅関係の雑誌をにぎわせていたし、彼の書く住宅本は広く読まれていた。住宅以外の仕事もこなしたが、根っから住宅向きの建築家だった。建築界のことはすみずみまで知り、建築界とズレなく重なるような人であった。98年62歳で逝去。

写真提供／文藝春秋

藤森照信
Fujimori Terunobu

建築史家。建築家。東京大学名誉教授。専門は日本近現代建築史、自然建築デザイン。おもな受賞＝『明治の東京計画』（岩波書店）で毎日出版文化賞、『建築探偵の冒険 東京篇』（筑摩書房）で日本デザイン文化賞・サントリー学芸賞、建築作品「赤瀬川原平邸（ニラ・ハウス）」（1997）で日本芸術大賞、「熊本県立農業大学校学生寮」（2000）で日本建築学会作品賞など。

現代住宅併走
Miyawaki Mayumi × Fujimori Terunobu



宮脇の図面を当時の建築学生はじっと見つめたものである。第1期の平面図。後に敷地奥に第2期が建てられた。

思い出した。

鉄筋コンクリートの箱の中に吉村順三とジャポニズムを組み込んで〈まつかわ・ぼっくす〉は誕生した。自閉に包まれた開放が可能になった。元気な頃の宮脇さんとはまれに会ってもたいして建築の話をしなかったことが今となっては悔やまれる。

7

7／2階奥の和室。

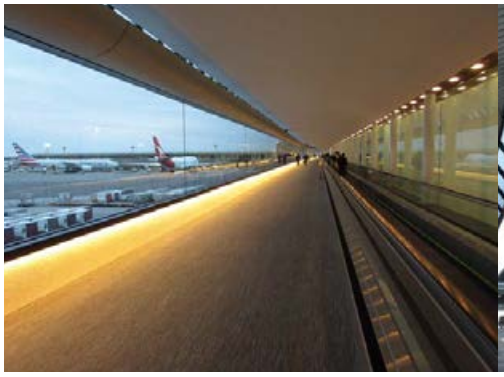
最新水まわり物語 ― Number 38

成田国際空港

「GALLERY TOTO」

成田発、日本のトイレを世界に発信

今年4月24日、成田国際空港に新たなくつろぎのスペース「NARITA SKY LOUNGE（ナリタスカイラウンジ）和（わ）」が誕生した。第2旅客ターミナル本館とサテライトを結ぶ連絡通路の出国エリア内に新設された、全長約130m、総面積約2200㎡のスペースは、出国手続き後や乗り継ぎ便を待つ時間をゆったりと過ごしてもらうことを目的とする。ラウンジには、カフェやマッサージ店のほか、ひとりでくつろぐことのできるパーソナルブース、家族で過ごすファミリーベンチコーナー、PCデスクなどが用意され、出発前のひと時を、リラックスして過ごせる工夫が施してある。日本から母国へ帰る人や、乗り継ぎで日本を経由していく海外の人々を意識して、全体のデザインイメージはその名のとおり「和」。和紙を使った照明、畳のベンチなどのほか、人力車の体験乗車や着物の着つけ体験といったイベントも準備されている。そんな空間の一角でひときわ異彩を放つのが、ガラス越しに次々と映し出されるパフォーマンス。ラウンジ施設のなかでも〝目玉〟となる「GALL



成田国際空港第2旅客ターミナル外観（右／写真提供：成田国際空港㈱）と、サテライトへ向かう連絡通路（左）。

取材・文／市川幹朗　写真／阿野太一（54ページ下2点、およびポートレイトをのぞく）

GALLERY TOTO正面。影絵のようなパフォーマンスがあざやかに映し出される。

世界最大級のLEDパネルを設置

ERY TOTO」である。

既成概念にとらわれないガラス張りのトイレ空間

「体感型トイレ空間」を謳うGALLERY TOTOは、トイレであるとともに最新のTOTO製品を見られ、実際に使うことができるギャラリーでもある。

成田国際空港では、ラウンジ計画当初からここにトイレを置く予定だったが、飛行機を乗り継ぐお客さまに今までにない充実した施設を提供するため、「日本のトイレ文化・技術力は日本が世界に誇る強みであり、日本の玄関である成田国際空港において、そのすばらしさをお客さまにお伝えしたいとの思いから、トイレ整備をお願いした」（成田国際空港・徳元義博さん）そうだ。TOTOでは、イタリアとイギリス出身で、日本文化にもくわしいアストリッド・クラインさんとマーク・ダイサムさんに白羽の矢を立て設計を依頼。類例のない、新しいトイレ空間への模索が始まった。

「最初に『トイレの既成概念をはずして考えて』と言われたんです。それで、空港から飛び立つ前の、いい思い出になるような印象的なスペースを考えました」（アストリッド・クラインさん）。

出来上がったスペースはガラス張りで、その中にさまざまな平面形のブースが置かれている。「一番プライベートな空間でありながら、ギャラリー、空港、世界へと開かれた、とてもパブリックなスペースに、というのもコンセプト」（マーク・ダイサムさん）との言葉どおり、トイレの中からも大空へと飛び立つ飛行機が見えるという、驚きのトイレ空間に仕上がっている。

清潔感、技術力、相手への気遣い日本のトイレ文化を世界にアピール

GALLERY TOTOのガラスの箱に並ぶブースは全部で10個。中央の入り口を入って右に多目的トイレ、左に授乳室があり、それ以外の4つずつが男女のブースとなる。ブースの形はL字あり、台形あり、T字ありとさまざまで、同じ形のものはない。「すべてがスクエアなブースより、ひとつずつ違ったほうがスペシャルな感じがするでしょ」とクラインさん。各ブースには、ネオレストAHタイプやRHタイプ、RESTROOM ITEM01（ゼロワン）、内装用防汚陶板のハイドロセラなどTOTOの最新商品がセットされるとともに、水をイメージさせる世界の景勝地の写真にグラフィックを施したものが大きくプリントされ、最新トイレと同時に美しい風景を楽しむことができる。ちょっとユニークなのは、白い壁面や建具に映える赤と青のインジケーター。各ブースについていて、あいているときは青色だが、人が入ると赤になり、30秒単位で点灯幅が延びていく。ブースにどれくらいの時間入っているかがわかる、砂時計のような仕掛けだ。通常、ブースに入ると自分以外の動き

ブース

はないものだが、「何かおもしろいものがないとギャラリーじゃないから」（ダイサムさん）とあえて内外で認識できるようになっている。

こうした内部の仕掛けに負けない、外から見える大きな特徴が、世界的に見ても最大級とされるフィリップスエレクトロニクスジャパンの「ルミナス テキスタイル」。この大きなLEDパネルに、映像作家・為永泰之氏が制作した「珍しいキノコ舞踊団」のパフォーマンスなどが映し出される。ポイントは、高精彩化するのではなく、逆に映像を粗くし、それを布地に投影することで、あたかも障子越しに影絵を見るようなイメージをつくっていること。

「ギャラリーやブース内を見てもらえば技術力や清潔感といった日本のトイレ文化は感じてもらえると思いますが、この、少しぼやけた映像も、はっきり言うのではなく、相手をおもんばかってあいまいにしながら伝える、という日本文化に通じるのでは」とクラインさんは笑いながら語る。

パフォーマンス中に、トイレに腰かける動きもあることから、トイレの中が透けて見えていると錯覚しそうだが、その人がやがて楽しく踊り出すことで、驚きはおもしろさに変わっていく。

最先端技術や清潔さ以外にもさまざまなことを感じることができる「GALLERY TOTO」は、日本を離れる間際の人々に強烈な印象を与え、世界に向かって日本のトイレ文化を発信している。

男子トイレ
1

男子トイレのブースには大便器と小便器を設置。小便器はRESTROOM ITEM 01、大便器はネオレストRH。

女子トイレ
8

景勝地の美しい写真に目を奪われるブース内部。写真以外の壁面には、内装用防汚陶板ハイドロセラを設置。

モニター

ブース壁面に設置されたモニターには、TOTOの水を操る技術を伝えるイメージ映像などが流されている。

入り口部分

中央のブースのコーナーに表示される青と赤の男女ピクトグラムも、影絵のように少しぼやけさせている。

Mark Dytham

Astrid Klein

KLEIN DYTHAM
ARCHITECTURE

マーク・ダイサム
アストリッド・クライン

Tokumoto Yoshihiro

成田国際空港
事業部門旅客ターミナル部
事業管理グループ
マネージャー

徳元義博

GALLERY TOTO

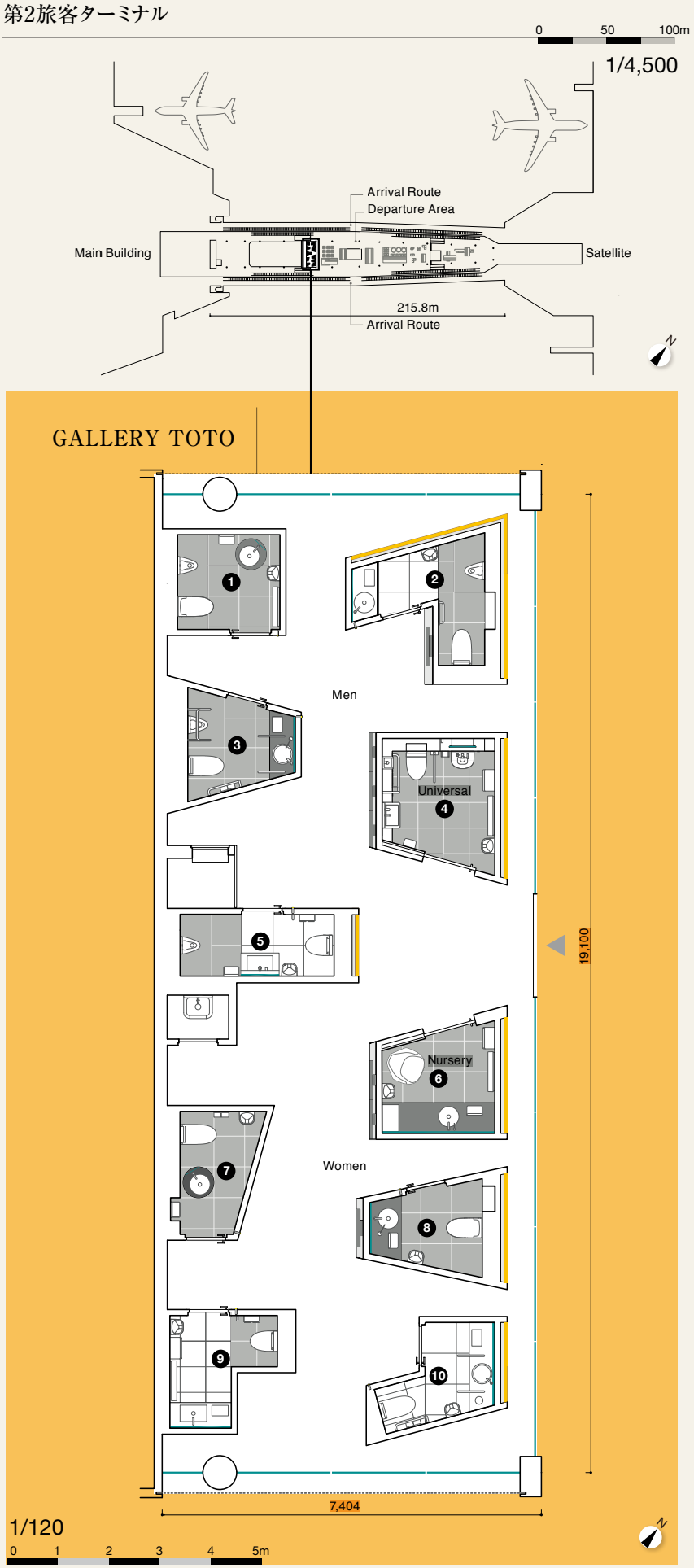
Data

建築概要

所在地	千葉県成田市香取字上人塚148−1
主要用途	パブリックトイレ
事業主	成田国際空港+TOTO
設計・監理（建築）	クライン ダイサム アーキテクツ
（設備）	TOTOエンジニアリング
施工	TOTOエンジニアリング、丹青社
延床面積	138.00㎡
設計期間	2013年12月〜2014年11月
施工期間	2015年1月〜3月

おもなTOTO使用機器

男子トイレ	❶❷❸❺
女子トイレ	❼❽❾❿
授乳室	❻
大便器ゾーン	
大便器	RESTROOM ITEM 01、ネオレストAH2W、ネオレストRH2W
紙巻器	YH63B#MS、YH63SD
手すり	XPTC01W、XPTU01ほか
小便器ゾーン（男子トイレのみ）	
小便器	RESTROOM ITEM 01
汚垂石	ハイドロセラ・フロア
洗面ゾーン	
洗面器	クリスタルボウル丸型洗面器MR700、クリスタルボウル角型洗面器MR710、ボウル一体タイプMC50ほか
アクアオート（自動水栓）	REAH03A1RS120A、TEN12LHほか
オートソープディスペンサー	TES141M、TES131M、CEA0120（CERA）
手すり	XPTC01W、T112CP5Sほか
アクセサリー	
クリーンドライ（ハンドドライヤー）	TYC420W、TYC300WN
ベビーチェアー	TKA15
ベビーシート	TKA25
フィッティングボード	YKA40
※壁面一部	
ハイドロセラ・ウォール	
多目的トイレ	❹
大便器・小便器・洗面ゾーン	
RESTROOM ITEM 01	



根建工務店

nedate CONSTRUCTION

誠実に、堅実に、お客さんの希望に応える

代表取締役 根建敏行 さん

父親から大工のイロハを学ぶ

神奈川県の大和地域を中心に活動を展開する根建工務店が創業したのは1984（昭和59）年。根建敏行さんの父親で、現会長の伊介さんが起こした会社だった。ただ、「古いことはぼくもよくわからない」と根建さんが苦笑しながら教えてくれたところによると、伊介さんはずっと一人親方のような仕事の受け方をしていたようで、会社にはしていたものの夫婦だけの家族経営。大和、厚木周辺の住宅の防音工事や増改築工事などを手がける大工として仕事をしていたらしい。根建さんは、そんな父親の背中を見ながら育ったこともあって、学校を卒業後、一時ほかの仕事をしてみたものの、やがて父親の元に戻り大工修業を始めることになる。

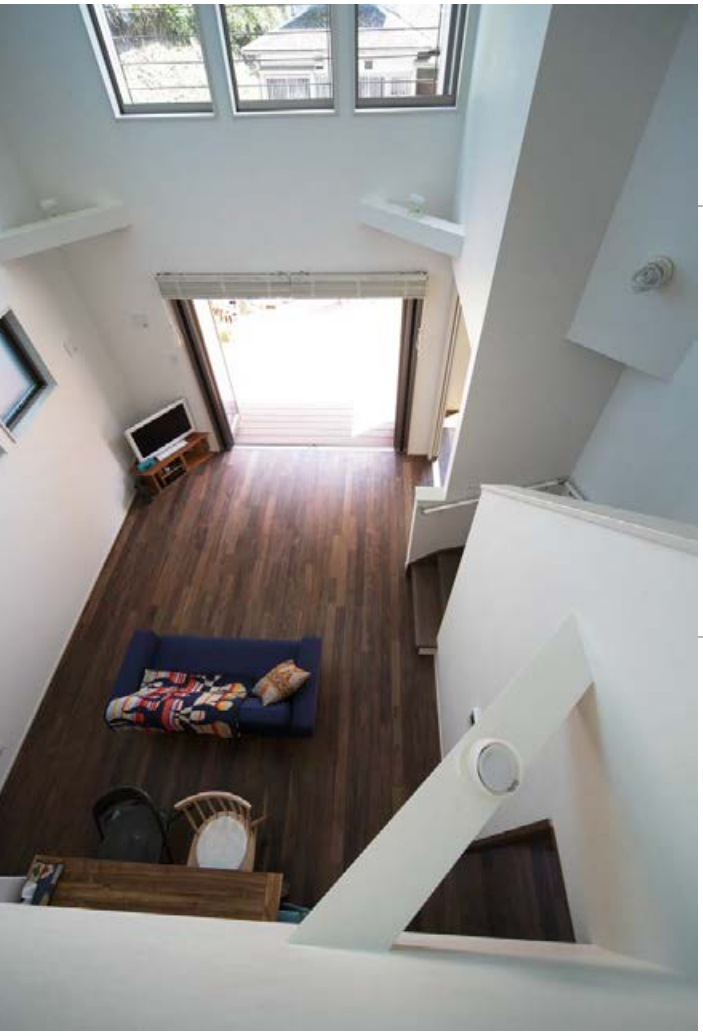
「最初から大工になりたいと思っていたわけではなかったんですが、ものづくりは小さい頃から好きでした」

根建さんは建築の専門教育を受けたわけではなかったから、文字通り一から父であり親方である伊介さんに建築のイロハを学ぶ。「たぶん、墨付けして刻んでという作業工程を習った最後の世代じゃないでしょうか」

時代はちょうど平成に入ったばかりの頃だった。

ニーズを見きわめた家づくり

昨年、根建工務店が手がけた新築一戸建ては約150棟。社員10名の工務店としては、驚くような数字だ。ただ、根建さん



写真上／根建工務店本社前にて。下／根建工務店が施工した鎌倉市・K邸のリビングを見下ろす（以下、左ページの写真はすべてK邸）。2層吹抜けのダイナミックな空間に明るい光が降り注ぐ。

地域に生きる会社 Volume 66

今、住宅会社の動きから目が離せない。
活動領域はさまざまだが、
それぞれの土地柄、会社の性格、
そして会社をリードする人物の性格、
マーケティング戦略……。
これは、その個性的な活動で
地域に生きる会社のドキュメント。

根建敏行

ねだて・としゆき
1971年神奈川県生まれ。神奈川県立厚木南高校卒業後、92年根建工務店入社。2012年から代表取締役。「関連するすべての業者さんの和を大切に、人のつながりを重視する」をモットーに、幅広い人脈を築いている。

の話を聞いていると、「がんばって、バリバリ受注を増やしました」という貪欲な姿勢はまったく感じられない。どちらかといえば、受けているうちに増えてしまったといった印象だろうか。

そもそも、小さな請負仕事が中心だった根建工務店が、新築一戸建てにシフトしていったのは、90年代後半から。大工として一人前になりつつあった根建さんが、不動産業と組んで家をつくる方向へ舵を切って以来である。そのため現在の根建工務店の仕事の大半は、不動産業からの紹介でつくる、いわゆる「売り建て住宅」だ。不動産業者が、土地を購入したお客さんに施工者を紹介する仕組みで、「建築条件付き」として根建工務店での家づくりが決まっているところも多い。

「直接依頼を受ける注文住宅に比べると、こだわりが強いお客さんは少ない」(根建さん)から、効率的に工事が進められるのだという。たとえば断熱性能に関しては、「基本仕様として、断熱性の高いボードを使って外張り断熱する構法と発泡ウレタンで充填断熱をする構法の2種類を用意して、選んでもらう」方式を採用。基本仕様が決まっているため、建て主も希望が絞りやすいということだ。もちろん、それ以外の希望にも対応は可能だが、基本仕様から大きくはずれるような要望は少ない。こうした、住まい手側の姿勢を見きわめた家づくりに加えて、おもしろいのが根建さんの姿勢。

「大きな開発などは手がたりないのでお断りしています。地元の小さな不動産屋さんとのつながりを大事にしたい」と、30軒以上の不動産業者と付き合いつづける。また、会社として建築士登録をしていないのも特徴だろう。「設計は、外部の設計者にお願いします。設計者の方からの仕事の紹介もありますから、その関係はくずしたくない」。この誠実さと堅実性、さらに大工出身の社長が目を光らせる技術力が、地元で広く受け入れられる理由にちがいない。

当面の目標は社内体制の強化。「とにかく人がたりない状況なので、アフターサービスなどにも十分な対応ができていない」のが現在の悩みの種。今年に入ってから設計スタッフをとるなど少しずつ体制固めを進める。「まだまだこれから」。控えめな根建さんの言葉の奥に、そんな意欲が透けて見えた。

正面外観。大きな家型に包まれるような表情が印象的。

nedate CONSTRUCTION

右／1階浴室。左／1階浴室脇のトイレ。海が好きだったKさんが土地探しから始めた家づくりは、知り合いからの推薦で根建工務店にたどり着いた。引っ越してまだ数カ月だが、「大満足」(Kさん)の出来ばえになっている。

Data

有限会社 根建工務店	
●本社所在地	
神奈川県大和市福田1-11-5	
●電話	
046-268-4061	
●代表取締役	
根建敏行	
●会社設立	
1984年	
●従業員数	
10名	
●事業内容	
新築、増改築・リフォーム、建築設計、施工	
●売上高	
22億円(2015年3月期)	
●URL	
www.nedate.jp/company.html	
●K邸TOTO使用機器	
バスルーム	
サザナSタイプHDV1616WS	
トイレ(1F+2F)	
ウォシュレット一体型便器ZJ	
CES9135L	

取材・文／市川幹朗　写真／山下恒徳

フィールドオフィス・アーキテクツ展

“Living in Place”

田中央工作群 活出場所

フィールドオフィス・アーキテクツは、日々の生活体験に根差した創作活動で、
水と緑の豊かな台湾の都市・宜蘭（イーラン）の風景を豊かに描き換えてきました。
また創設者の黄聲遠（ホァン・シェン・ユェン）の思想にひかれた多くの若者が集まり、
同じ志のプロ集団として活動するスタイルは、台湾でも特異な存在といえます。
本展では、彼らの活動や宜蘭の町の変遷を、
模型・写真・映像・インスタレーションなどを用いて、さまざまな角度からご紹介いたします。

津梅橋遊歩道 2005-2008
Photo ／フィールドオフィス・アーキテクツ

羅東文化工場 1994-2014
Photo ／ Chen, Min-Jia

Living in Place

文／黄聲遠（ホァン・シェン・ユェン）

宜蘭の風土に根差した設計集団フィールドオフィス・アーキテクツは、20数人のメンバーを核にした、現代の台湾で徐徐に成長と拡大を続けている100人近くの「想いを同じくする意志同盟」である。真実を探し求める生き方を追求しつづけて以来、20年のうちにようやく組織らしいものになってきた。フィールドオフィスには、純粋な意志に突き動かされてこうした生き方を選ぶ者たちが、おのずと集まってきた。「プロ集団として地域に根差し、新しい生活を創造したい」と夢見る若い世代にとって、この生き方は普遍的な選択肢になるかもしれない。

本展が体系的でもなければ構成も整っておらず、またあまり明確でもないことを許してほしい。それというのも、フィールドオフィスの仕事は、さまざまなできごとが同時多発的に発生しているうえに、それぞれがまだ進行中で、今後も手を加えられる可能性があるからだ。

日差しとともに雰囲気が変わるTOTOギャラリー・間の空間に触発され、本展のテーマとして4つの「気づき」を設定した。これらに従って、私たちがこれまでたどってきた紆余曲折の体験を、ぜひあなたにも追体験してもらいたい。

気づき1 時間と仲よく

新たな可能性を求めてアメリカに渡ったものの、結局挫折して台湾へ戻り、宜蘭に住み着いた。やがて宜蘭固有の気候や神話、歴史、反骨精神に接するうちに、私はこの土地の民主的な国民性が失われていないことに徐々に気づいていった。若い世代も専門性という縛りにとらわれなければ、チャンスはそこらじゅうに転がっている。依頼主がいなければ自分で探せばいい。そうした発見の蓄積と、公共空間のプロジェクトが帯状に広がっていくうちに、私たちの存在は人々の記憶に刻まれていった。

気づき2 山、水、土、海と暮らす

風、水、生態系は、都市を抜け、その先へ流れていく。その流れのなかでは、自分さえよけ

Next Exhibition
at
TOTO
GALLERY・MA

次回予告

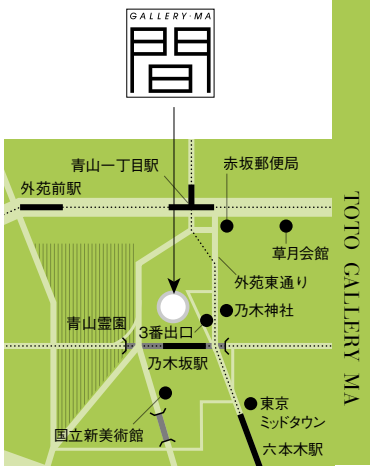
TOTOギャラリー・間 30周年記念展

歴史・文化・民族・政治・経済・気候など、さまざまな現実にたくましく向きあい、積極的な取り組みを展開しているアジア各国。TOTOギャラリー・間の創設30周年の節目として、今後の建築の行方を展望すべく、アジアの建築家５組を招聘し、彼らのビジョンを紹介する企画展を開催いたします。

会期
2015年10月17日(土)〜12月12日(土)
講演会
10月17日(土)日経ホール
＊事前申し込み制／詳細は7月下旬、TOTOギャラリー・間ウェブサイトにアップします。

TOTO ギャラリー・間

所在地
東京都港区南青山1−24−3
TOTO乃木坂ビル3F
電話／03(3402)1010
ファクス／03(3423)4085
開館時間／11:00〜18:00
休館日／月曜日・祝日、展示替え期間、夏期休暇(8月8日[土]〜17日[月])、年末年始
入場料／無料
アクセス
●東京メトロ千代田線
「乃木坂」駅下車 3番出口徒歩1分
●都営地下鉄大江戸線
「六本木」駅下車 7番出口徒歩6分
●東京メトロ日比谷線
「六本木」駅下車 4a出口徒歩7分
●東京メトロ銀座線・半蔵門線、都営地下鉄大江戸線
「青山一丁目」駅下車
4番出口徒歩7分



TOTO GALLERY MA

www.toto.co.jp/gallerma/

会期／2015年7月10日(金)〜9月12日(土)

フィールドオフィス・アーキテクツ

田中央工作群

フィールドオフィス・アーキテクツは、黄聲遠（ホァン・シェン・ユェン）氏によって設立され、台湾の“宜蘭県”を中心に活動を続けている。黄聲遠氏は1963年台北市生まれ。1986年台湾東海大学を卒業後に渡米し、1991年イェール大学大学院修士課程を修了後、エリック・オーウェン・モスの事務所に勤務。1994年の台湾帰国と同時に宜蘭へ移住し、フィールドオフィスを開設した。その後20年間に、China Design Exhibition Outstanding Spatial Design Award (2012) やChinese Architecture Media Awards Best Architecture Award (2012) など、国内外で20以上の賞を獲得している。

フィールドオフィス・アーキテクツ／2008　Photo／Chen, Min-Jia

櫻花陵園入口橋　2003-2008
Photo／Chen, Min-Jia

フィールド・ドミトリー(リノベーション)　2007-2011
Photo／フィールドオフィス・アーキテクツ

ればいいという発想では、都市はいずれ廃れる。都市と田園は互いに助けあいつつ、双方からヒントを得ることで、より建設的に全体を運営できる。こうした問題に対して私たちが途中で匙を投げたりしないと理解されてからは、各方面の専門家たちが知恵を貸してくれるようになり、どうにか実務をこなせるようになった。

気づき3 基準線としてのキャノピー(天蓋)

キャノピーの実質的な機能は、意識的につくられた「空白」であり、民主的で階級のない社会を暗示している。ほどよい高さに基準となる線が引かれることで、見慣れた風景もまた美しく見えるだろう。こうした大小のキャノピーを通じて、建築は、文化の違いや政治の変動を超えて、時の経過に耐えられるのだと確信するに至った。

気づき4 ただ自分の身体に意識を向け、いつしか時を忘れる

本展のクライマックスは「宜蘭県立櫻花陵園」のプロジェクトである。ここでは環境に配慮した土木工学的技術に加え、晴れた空と雨と霧とこだまが交互に登場する映像によって現地の空気を再現する。その映像から、３本の川が三角州で合流し、幾重にも連なる砂丘の層が太平洋に向けて一面に広がる宜蘭の光景を思い浮かべていただきたい。

これら私たちの気づきを通して、誰もが一度は、故郷の美しさを守るために奮闘してほしいと願っている。

TOTOの最新情報

TOTO News 1

TOTOミュージアム8月28日オープン

TOTOは、本社敷地内（北九州市小倉北区）に「TOTOミュージアム」を2015年８月28日（金）にオープンいたします。TOTO創業100周年を記念して設立する「TOTOミュージアム」は、北九州ショールーム、TOTOミュージアム（旧TOTO歴史資料館）などを集約した施設となります。生活文化を創造してきたその足跡や、「創立から現在、そしてこれからのTOTO」をお伝えする場として魅力ある施設を目指します。みなさまのご来館お待ちしております。

「TOTOミュージアム」外観イメージ

TOTO News 4

TOTOグローバル商品各種デザイン賞受賞

ネオレストAC

TOTOグローバル商品の壁掛け便器「ネオレストAC」など３点が2015年のiF design賞を、「ネオレストRH」「C1バスルーム・ファニチャー」など３点がred dot design賞を受賞しました。両賞は世界的に権威のあるデザイン賞で、例年50カ国以上から5,000点ほどのエントリーがあります。TOTOの商品は造形だけでなく、技術力や使いやすさの点からも高い評価を受けました。

iF design award：www.ifdesign.de/
red dot design award：www.red-dot.de/

ネオレストRH

TOTO News 3

TOTOギャラリー・間が創設30周年を迎えます

みなさまに支えられ、「TOTOギャラリー・間」は、本年10月に創設30周年を迎えます。開設当初から建築やデザインのすばらしさをお伝えしたい、少しでも身近に感じていただきたいとの思いで走りつづけてきました。これからも建築・デザインの魅力を広く、国内から海外へと発信していきます。
30周年記念展では、中国、タイ、ベトナム、シンガポール、日本から、エネルギーあふれる30～40代の若手建築家５組を迎え、現在のアジアの建築がもつ力をご紹介します。

www.toto.co.jp/gallerma

TOTO News 2

「TOTO NEW MATERIAL カタログ」リニューアル

TLXS20B（8月発売予定）

「TOTO NEW MATERIAL（ニューマテリアル）カタログ」が2015年８月にリニューアル。TOTOの海外拠点で人気の水栓シリーズを新たに追加。また、使い勝手のよい人気のハーフベッセルシリーズや、ステンレスヘアライン仕上げのアクアオート水栓をはじめ、デザインにこだわった手洗い水栓など、さまざまなシーンでご使用いただける商品が、この秋多数発売予定です。
「TOTO NEW MATERIALカタログ」のご請求は、TOTOホームページにてお申し込みください（８月１日より）。

www.toto.co.jp/tnm

TOTOからのお知らせページです。
イベント、新商品、最新情報など知っておいていただくと
お役に立つ情報を心がけています。
合わせてご注目ください。

www.toto.co.jp/publishing

TOTO出版のお知らせ

Book 2

『手塚貴晴+手塚由比 建築カタログ3』

「屋根の家」から「ふじようちえん」を経て、手塚貴晴＋由比夫妻がたどり着いた先とは。建築界内外から幅広い支持を得る人気シリーズ、「手塚貴晴＋手塚由比 建築カタログ」の完結編。第３巻では小児がんの子どもたちが家族と暮らしながら治療を受けることのできる病院、「チャイルド・ケモ・ハウス」や軒を地域住民に〈貸す〉ことで開かれた施設を目指す「軒の教会」など、住宅のみならず野心的な公共建築も多数収録されている。ますます活動の場を広げる手塚氏の新境地に触れられる１冊。

- 著者／手塚貴晴+手塚由比
- 定価／2,700円
- 体裁／A5判（148×210㎜）、並製、376ページ、和英併記
- 発行日：2015年7月3日（予定）

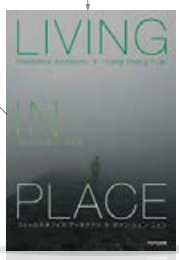
Book 1

『Living in Place』

イェール大学で建築を学んだホァン・シェン・ユェン氏が選んだ理想郷は、台湾・宜蘭（イーラン）だった。宜蘭の町をよりよくしようと奮闘してきたホァンの建築群は、今では地元で絶大な信頼を得るに至った。ランドスケープデザインや隣地を巻き込んだ計画、さらに自身で設計した建築同士をつなぐプロムナードを創出するなど、建築家の職能を超えて活躍するホァン氏率いるフィールドオフィス・アーキテクツの軌跡を、世界初の作品集として紹介する。巻頭には都市計画者・小野田泰明氏（東北大学大学院工学研究科教授）による解説文も収録。

- 著者／フィールドオフィス・アーキテクツ+ホァン・シェン・ユェン
- 定価／2,600円（予価）
- 体裁／A5判（148×210㎜）、並製、288ページ
- 発行日：2015年7月9日（予定）

Present!



同封の「TOTO通信アンケート」にお答えいただいた方のなかから、抽選で10名の方にプレゼントいたします。

セラのお知らせ

やさしいフォルムのバスタブ新登場

CEY41814／690,000円（税別）

セラトレーディングでは、水まわり商品の「CERA ORIGINAL COLLECTION（セラオリジナルコレクション）」に新しいバスタブを追加しました。身体を包み込むような丸みのあるフォルムが魅力的なバスタブです。材質は、触るとしっとりとしたきめの細かい人工大理石を採用。優雅でリラックスしたバスタイムを堪能したい方におすすめです。

「CERA総合カタログ2015」のご請求は、セラトレーディングホームページ、またはファクスにてお申し込みください。
www.cera.co.jp　Fax：03-3402-7185

Information

『TOTO通信』定期購読をご希望の建築家をご紹介ください。

お申し込みはTOTO通信データ管理室まで → Tel / 093(513)6234　e-mail / toto_tsushin@jlink-net.com

＊法人あての送付となります。

Bookshop TOTO
Bookshop TOTO

- 所在地／東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル2階
- 電話／03（3402）1525
- 定休日／月曜日・祝日・「TOTOギャラリー・間」休館中の土曜日・日曜日・夏期休暇・年末年始

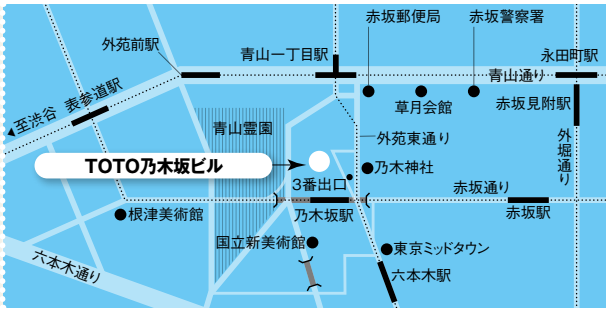
TOTO出版
TOTO Publishing

- 所在地／東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル2階
- 電話／03（3402）7138
- ファクス／03（3402）7187

全国の書店でお求めください。直営店Bookshop TOTOでもお求めになれます。書店遠隔の方はお問い合わせください。

セラトレーディング
Cera Trading

- 所在地／東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル 1階・地下1階
- 電話／03（3402）7134
- ファクス／03（3796）6155
- 営業時間／10：00～17：00
- 定休日／月曜日・祝日・夏期休暇・年末年始



アクセス／●東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分 ●都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車徒歩6分 ●東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車徒歩7分 ●東京メトロ銀座線・半蔵門線、都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車徒歩7分

次号『TOTO通信』は2015年10月上旬発行の予定です。

TOTO通信 2015年 夏号

TOTO通信 2015年 夏号 第59巻・第3号 通巻507号
発行日:2015年7月1日 発行所:TOTO株式会社 メディア推進部
〒105-8305 東京都港区海岸1-2-20汐留ビルディング24F TEL.03(6836)2172

VEGETABLE OIL INK
この情報誌には植林木・森林認証材などを原材料とする環境に配慮した用紙、ならびに印刷インキ工業連合会認定の植物油インキを主に使用しています。

TOTO

キッチンはもっともっと
楽しい場所になる。

インテリア発想×スイスイ設計——
TOTO システムキッチン CRASSO

タッチスイッチ水ほうき水栓
（ハンドシャワー式・エアイン）

すべり台シンク

ゼロフィルターフードeco

2015年8月発売

NEW CRASSO
クラッソ

商品についての技術的なお問い合わせ
TOTO技術相談室
TEL:0570-01-1010 受付時間:〈平日〉9:00～18:00〈土曜日〉9:00～17:00〈日・祝・夏期休暇・年末年始を除く〉
専門家コーナー「COM-ET」 www.com-et.com

『TOTO通信』のお届け先などの変更はお客さまNo.（封筒の宛て名ラベル右上に記載）も併せて下記までご連絡ください。
TOTOカタログセンター内 TOTO通信データ管理室 TEL.093(513)6234 FAX.093(571)0999
＊当社ならびに当社グループ会社は、個人情報の保護を社会的責務と考えます。お客さまからお預かりした個人情報は、
関連法令および社内諸規定に基づき慎重かつ適切に取り扱います。詳細はTOTOウェブサイト（www.toto.co.jp/）をご覧ください。

8172